でありました。

六月二日、鳳輦いよ〳〵兵庫を發し、西宮、蘆屋あたりを過ぎたまはんとする時、遙に見る淀川の畔より數千の人馬砂塵を天に揚げて馳せ來るものがありました。それは去年以來、長い籠城生活を終り、更に南都の賊兵を掃蕩した楠正成が、近畿七千の兵を率ゐて、奉迎のために出向したのであります。

天皇には、御簾を高く捲かせられ、正成を近く召し給ひ、

『大義早速の功、偏に汝が忠戰にあり。』

との勅がありました。嗚呼此の一瞬間の楠公の胸裏は、何人か想像することが出來ませう。一昨年の九月、初めて笠置の行在所に龍顏を拜し奉つた時から以來、楠公の心にあつたものは、たゞ此の一日を見んことのみでありました。其の最後の目的が、此の時に達せられたのであります。楠公、今は死すとも遺憾なしであります。暫く感激の熱涙を止めかねた正成は、謹んで、

『陛下の聖文神武の德に依らずんば、微臣奈何でか寸尺の謀を以て、强敵の圍を出づることが出來ませう。』

と極端なる謙遜、卑下の態度を以て奉答しました。

天皇には、いたく感賞あらせられ、正成に命じて先驅せしめ給うたので、七千餘騎の兵、菊水の旗を先頭に飜へし、步武堂々として先驅しました。かくて六月五日は、東寺に、六日を以てつひに二條の內裏に還幸あらせられ、中興の大業は、こゝに成つたのであります。

飲み易からざる苦杯

楠公の仕事は、これで終るべき筈でありました。もしも、中興の大業が、このまゝ完うせられたならば、楠公は安んじて河內の鄕土に餘生を樂しまれてもよかつたのであります。笠置山上に於ける、天皇の寄託は既に完全に遂行せられたので、楠公においては、何の心殘りもないのであります。

然るに當時の事情は、楠公をして、このまゝ鄕土に安居するを得しめなかつたばかりでなく、更に楠公に對して、飲み易からざる苦杯を嘗むることを强要したのであります。ほとんど日本全國を兵亂の渦に捲き入れ、幾多の大犧牲を拂うて、漸くにして贏ち得た建武中興の大業が、わづか數年にして土崩瓦解し、國史の上に、有り得べからざる變態時代、兩朝對立を招致したのでありました。さうして、楠公は、其の最大の犧牲として死なれたのであります。

建武中興が、何故に失敗したか。それについては、歷史家がいろ〳〵の意見を述べてをります。これには極めて複雜した事情があり、また事情のよく判明しないために輕々に論斷出來ぬ事柄もあります。しかし、大體についていひますと、當時の人々の心の持ちやうが惡かつたのであります。第一章に於いて述べたやうに、協同一致の精神に缺け、己を犧牲としても全體を生かすといふ心がけに乏しかつたのであります。もしも、凡ての人が楠公のやうな立派な心がけの人であつたならば、中興の大業は永遠に完うせられたでありませうが、ほとんど十人の中九人まで、否千人の中、九百九十九人までは、自己を中心として行動しました。

つまるところ、國民の團體的訓練が出來てゐなかつたといふことが、失敗の基であります。

閥族萬能時代

先づ第一に當時の天下を動かした武士の心持について考へなければなりません。藤原氏、平氏、源氏、北條氏と長い間ひきつゞいた閥族政治は、當時に於ては、最早拔くべからざる强い力をもつてゐました。國は王土なりといふが、當時の武士は、日本國の主として天皇を尊崇してゐるには相違ないが、自分自身の領地領民に對しては、どこまでも自分が主權者であることを信じてゐました。彼等が勤王軍を興し、北條氏を倒したのは、勿論北條氏の暴逆を憤り、皇室を貴ぶ精神に出でたのではあるけれども、決してそのために封建政治を破壞しようとは考へてゐなかつたのです。否、むしろ、自分のためにより都合のよい封建政治たらしむることを希望してゐたに違ひありません。率先勤王軍に參加したものでさへ、さうであつたとすれば、大勢に引きずられた兩股膏藥のともがらに至つては、いふまでもありません。かういふ封建的精神の結晶ともいふべき武士が、全國に割據してゐる以上、非常に强大な中央政府が、之を統率するに非ざれば、全國を平和に治めやうのないのは知れたことです。然るに當時の朝廷には、何の武力もなかつたのみならず、公卿たちの中に、之に對して何等の對策を講じ得る人もありませんでした。そこで、名だけは王政復古であるが兵馬の權は依然武家の占有するところであると、どうしても其處に强大な中心勢力を必要とすることになつて來ます。さうして、北條氏に代りて新らしい北條氏が生れ、鎌倉幕府を倒しても、又、それに代るべき閥族政治の大中心が生れる筈であります。

其の危機を夙くより察してゐた人は、皇族には、護良親王、公卿には藤原藤房でありました。

そも〳〵、天皇が兵馬の權を執り給ふことは、神武天皇以來の、建國精神の顯現であります。中頃、これを武家に委ね給うたことは、天皇政治の墮落であると極言して差支ないのです。そこで、護良親王は、さしあたり、自分が征夷大將軍となつて、兵權を手中に收めようとなさいました。天皇親政の立前からいへば、征夷大將軍などといふ役目も妙に思はれるのですが、其の當時の情勢は卽座に斯ういふ形式を破るわけには行かぬ故、中興第一の元勳であり、皇子である護良親王が、當座の過渡的方法として、征夷大將軍を請はれたといふことは、機宜に適した處置であつたやうに思はれます。かうして、眞の意に於て王政を古に復さうといふのが、親王の大理想であつたらうと想像されます。

英邁なる後醍醐天皇には、もとより親王の此の理想を嘉し給うたでありませう。否、親王の此の御理想は天皇の御精神そのものであつたでありませう。しかしながら、當時の朝廷が、凡て皆、此の高邁なる御理想に共鳴してゐたのではありませんでした。むしろ、平々凡々たる俗論が、滿廷を風靡してゐたであらうことは、「太平記」の記事によつても察せられます。その記事によると元弘二年、護良親王に對し、四海騷亂の程は其の姿を俗體に替へらるゝと雖、世間靜謐の上は、急ぎ剃髮染衣の姿に歸し、門跡相承の業を事とし給ふべし、と勅諚があつたといふのです。天皇が、このやうなことを仰せらるる筈はありません。恐らくこれは、大臣たちのやつたことでありませうが、天下の兵權を朝廷に收めんとの大抱負を以て行動して居られ

る親王に對して、再び僧侶になれとは、何といふ俗惡な愚論、何といふ侮辱、親王の御憤慨も想像せられます。如何に當時の長袖の徒に天下を見るの明なく、天皇の御理想を解する頭腦がなかつたかは、この一事でも知られるでありませう。

もしも當時の朝廷にもう少し人があつて、護良親王の大志が成さしめられたならば、建武中興の大業は、燦として輝き、日本の歴史は、今日とはもう少し異つたものになつて居たかも知れません。然るに事實は、それと正反對であつたことは、遺憾の極みであります。

此時に當り、因循姑息、亂雜不統一なる新政府に對し、武家勢力を代表する一大選手として、閥族政治を擁護すべく立つたのが足利尊氏であります。北條氏の運命に見限りを付け、最後の土壇場に立つて巧みに轉身した尊氏は、己れ北條氏に代つて天下を掌握せんとの大望を懷き着々其の魔手を延ばしはじめました。茲に於てか、護良親王と尊氏とは、正面衝突をなさざるを得ないのであります。親王と尊氏との衝突については、感情的な行き違ひがあつたといふやうなことが傳へられてゐますが、その樣なことは枝葉な問題で、親王と尊氏とは、到底相容るゝことの出來ぬ仇敵であります。兵權を皇室に掌握しようといふ親王の大理想の前に、尊氏は赦すべからざる罪人であり、武家の棟梁たらんことを以て畢生の理想とする尊氏にとつて親王は何よりも厄介な邪魔者であります。それが衝突せずに終る筈はありません。慧眼なる護良親王は、夙くも尊氏の野心を觀破し、志貴山に據つて大に兵を徵し、尊氏の誅伐を勅許せられるゝやう請はれましたが、天皇には堅く之を禁められ、たゞ征夷大將軍の宣旨のみを許され、速に上京すべき旨を傳へられました。よつて六月二十六日、親王には赤松圓心、四條隆資、殿法印良忠、中院中將定平其他數萬騎を率ゐて京都に入り、其の勢威人を驚かすばかりでありました。

親王には、これから後も、尊氏に對する警戒を緩め給はず、常に之を誅戮するの機會を覗つて居られました。然るに尊氏の勢力は、此頃既に拔くべからざる牢固たるものとなり、朝廷に對する一大脅威でありましたから、天皇には萬一、親王の計畫の失敗した場合、其の影響の及ぼすことの大なるべきを思ひ、つとめて親王を抑壓したまうたやうであります。しかし、尊氏は常に針の蓆に坐るやうな無氣味さで、たえず親王と相拮抗して居りました。

准后藤原廉子

かくて、尊氏は親王に對する恐怖と、憎惡の念から憎むべき陰謀を着々として進めました。而して、尊氏がこの陰謀を實現せん爲に利用したのは、准后、藤原廉子であります。廉子は藤原公廉の子、始め中宮に仕へて居ましたが、容姿端麗、才氣人に勝れてゐるので、天皇に召され、恒良親王、成良親王、義良親王を生み、元德三年從三位に叙せられ、天皇の隱岐に幸し給うや、配所に從ひて辛酸を嘗めた婦人で、三千の寵愛を一身に集め、「太平記」にも『管に殊艶尤態の獨り能く是を致すのみに非ず、蓋し善巧便佞、叡旨に先だつて奇を爭ひしかば、花の下の春の遊、月の前の秋の宴にも、駕すれば輦を共にし、幸すれば席を共にし給ふ』とあるほどでありましたから、宮中における勢力はすばらしいもので、その言ふところ行はれざるなき有樣

でありました。されば中興の業成るや、便佞のともがらは、競うて准后に媚び、内奏によつて恩賞を左右し賞罰を紊り、つひに禍亂の源となるに至つたのであります。足利尊氏の狡獪なる、これに着目せぬ筈はありません。彼は先づ何よりも第一に、准后廉子に諛ひ、これによつて自己の野望をとげようと計畫しました而して、當時の有樣が、彼の野望を實現するのに、實に此上もなく都合よく出來てゐました。

第一に閥族尊重の精神が、當時の朝廷に滲み込んでゐたことです。王政復古の大事業が、眞に王政復古の大精神を伴つてゐたならば、このやうなことはあるべき筈ではありますまい。中興の元勳は、護良親王を第一とすれば、之に次ぐものは正成でありました。しかも正成なくしては、護良親王の仕事は成らなかつたでありませう。されば、殊勳第一の楠公に對して、最先最高の行賞があるべき筈でありました。然るに朝廷の閥族尊重は、源氏の名家であり、關東の豪族であるといふことのために、尊氏の最後の變節的返り忠を、甚だしく有難がつたのでありました。さうして、六月六日、天皇還幸の即日、他に先立つて尊氏を治部卿に任じ、直義を左馬頭に任じたのであります。此の時既に朝廷の鼎の輕重が問はれたといつても過言ではありますまい。狡獪な尊氏の胸中に、此の時必ずや武家政治復興の確信が出來たことでありませう。明治維新の政治家が、天下の大諸侯をも、足輕出身者をも、同樣に廟堂に立たしめた精神と比べると、天地雲泥の相異であります。しかしながら、これを以て、あながちに天皇をおとがめ申すべきではありますまい。明治の維新でさへ、薩長土肥といふやうな、巨大なる藩閥の力を藉らずしては出來なかつたのです。建武の中興に於て朝廷が閥族の力を利用しようとなさつたことは、當然といへるでありませう。たゞ、その閥族の徒が、天皇の大精神を理解しなかつた故に、失敗に歸したのであります。それは一つには、時代の罪であります。

朝廷を以て與し易しと見た尊氏は、准后を利用して宮中を攪亂し、護良親王を斥くるの陰謀を企てたのだと言ひ傳へられます。それが、どの程度まで事實であつたかは分りません。「太平記」にあるやうに、廉子が繼母根性から、護良親王を斥けて、己が腹より出でたる皇子を位に卽けんが爲に、讒言を事としたといふことは、少し穿ちすぎてゐるかも知れませんが、便佞巧慧、思ふところ行はれざるなき准后に取つて、天資英明、武略に富み氣概に富み給ふ親王の存在は、多少煙たいものであつたかも知れませぬ。そこに付け入つた尊氏の狡獪は憎むべきであります。

建武二年の春、親王、微行して參內の時、俄に之を拘禁し、鎌倉に押送せしめ、二階谷に之を幽し、足利直義をして監視せしめ給うたといふことが、この陰謀の結果であります。これは天皇の御治世における最大の失敗でありました。よしそれが天皇の御心より出でたものでなく、周圍の狀勢止むを得ざりしものと假定しても、中興の第一の柱はこゝに折れたのであります。

論功行賞紊る

足利尊氏の非望、護良親王の沒落によつて、始まつた中興の失敗は、論功行賞の不公平によつて、愈〻其勢を加へました。始め中興の業成るや、藤原實世を以て上卿となし、行賞の事に當らせましたが、諸國の武士、競うて准后に媚び、內謁を以て勳功を申立て、恩賞を請ふもの引きも切らぬので、數箇月を經て僅に

二十餘人を決定したばかりでありました。そこで藤原藤房をして之に代らしめました故、誠忠、公平の藤房は、忠否を糺し、淺深を分ち、最も公正な行賞を行ふべく大努力を拂つたのですが、その誠意を裏切つて、内奏により朝敵であつたものも本領を安堵せられたり、何の功なき者も多大の所領を賜うたりするので、藤房大に憤り、病と稱して其の職を辭しました。よつて九條光經をして之に代らしめられましたので、光經も亦、大に公正な行賞を行はうと意氣込んだ甲斐もなく、内奏の事絶えず、妓女、藝人の類まで内奏により所領を得、武士に分ち與へる土地がなくなつてしまつたので、行賞の方法なき有樣となつたのであります。かくていつまでも論功行賞の埒があかぬばかりでなく、一たび下された恩賞を召し返されるなどの醜態があつて、天下の人心いよ〳〵離反し、武家政治の昔を懷ふもの頻出するに至つたのであります。

この論功行賞が、如何に不當なものであつたかは、中興第一の殊勳者楠公が、足利尊氏の弟直義にすら如かざる待遇を受けてゐることを以て知られるのであります。此時、武士にして最高の行賞を受けたものは足利尊氏であつて、正三位、治部卿、武藏、常陸、下總守護を拜して居ります。新田義貞之に次ぎ、從四位上、播磨守、上野播磨兩國守護を賜ひ、足利直義之に次いで、正五位下、左馬頭、相模、遠江守護を賜はつて居ります。楠公は其の下にあつて、從五位上を賜はり、檢非違使、攝津河内兩國守護に任ぜられました。勿論、純忠至誠の楠公は、報賞を目的として働かれたのではないが、元弘以來、天下に魁けて大義を唱道し百戰して大敵を退け、身命を擲つて王事に盡した結果が、從五位上といふ甚だ卑しい位であつて、一朝の變節のために、勤王の名を得たに過ぎない尊氏が、正三位、大臣の位を得たとは、石が流れて木の葉が沈むの類です。

しかし、位階に於ては劣つてゐたが、仕事としては、楠公は大切な役目をあてがはれました。それは楠公の力量人格が、どうしても、此人でなくてはとの感を、朝廷に懷かしめたからです。攝津河内の守護といふことは、もとより楠公の勢力範圍であり、舊領であることですから、不思議ではありませんが、檢非違使といふ役目は最も重要な役目で、これに任ぜらるゝものは、よほど、卓出した人でなければならぬのであります。これは司法警察を掌る役目で、鎌倉時代以後、其の制度の衰へてゐたのを、中興と共に復興せられたのでありました。楠公が此の職に補せられたについては、天皇が深く楠公の公正なる性格に御信賴遊ばされたからでありませう。不幸、中興のこと早く失墜し、楠公の手腕が實際には揮はれなかつたのであるが、兎に角楠公の肩に、大きな責任が期待せられて居つたには違ひありません。それと同時に又、楠公は記錄所寄人といふ要職に補せられました。記錄所は、庄園の證券を記錄調査する外、一般の訴訟を審議し、又豫算の審議をするなど、非常に重要な政務機關で、これも一時有るか無いか分らなくなつてゐたのを、後醍醐天皇の御世に至つて之を再興したまひ、庶政を振興せしめたまうたのでありますが、その寄人は十一人であつて、其の中たゞ二人の武士を除くの外は、代々法律の家に生れ、事務に通達した公卿でありました。而してその二人の武士とは、楠正成、名和長年の二人であつたのです。このやうに、嚴正公平なるべき行政、司法の要職に、楠公が當られたといふことは、其の高潔なる人格と、卓越せる手腕とを、天皇が御信賴になつたからでありませう。

そのやうに、實際の手腕、力量に於てはすぐれて居つても、官位においては甚だ低く、直接天皇に上奏するは愚か、内昇殿をさへ許されぬ楠公には、表向き、尊氏を牽制する力などはある筈がない。此の場合、尊氏の野望を取挫ぐ力のあるものは、新田義貞のみです。其の義貞は、快男兒ではあり、誠忠の士ではあるが其の力量に於ては遙に尊氏に及びません。尊氏は、よく士に任じ、人を用ひ、將に將たる器で、其の出所進退を誤りさへしなければ、あつぱれ大人物とよばるべき人間でありますが、新田公は、其點に於ては、遙かに尊氏に劣つてをられたやうであります。尊氏は、ひそかに楠公を畏敬し、あはよくばこれを自分の味方に引き入れようと苦心をしてゐた程ですが、新田公はむしろ楠公の威望を嫉み、なるべくその獻策を用ゐぬやうにせられた形迹があります。楠公いかに力を揮はうとしても力の揮ひやうがなかつたので、尊氏はその虚に乘じて、どしどしと自分の地歩を築き上げて行きました。

千里の馬

藤原藤房は、笠置山以來、主上と苦難を共にし、はる〴〵常陸の片田舍に流離の憂目を味ひ、中興の業成つて後も、ます〳〵思誠を盡して、帝德を翼賛すべく、日夜競々として及ばざるを恐れて居りましたが、天皇には、長い間の御辛勞から解放せられて、幾分政治に倦み給ふやうにも見え、長夜の宴に耽りたまふやうなこともあつたのが、極端な理想家であり潔癖家である藤房には、ひどく心配の種となりました。その中に非望をいだくやからが、天下に横行し、新政治を嘲る聲が、しば〳〵耳に入りますので、憂心沖々、しば〳〵血を吐くやうな思ひで、諫言を奉りました。しかし、天皇にはどういふ御考からか御取り上げがないのでありました。其頃ある時、出雲の鹽冶判官高貞がすばらしい馬を獻上しました。骨高く、筋太く、頸は鷄の如く長く、髪は膝を過ぎ、背には龍のやうに渦をまいた毛があつて、その數を數へると、四十二、兩耳は竹を削いだ如く天を指し、雙の眼は鈴を張つた如く、朝出雲の富田を發して、七十六里の道を走り、夕方には京都に着き、四蹄を縮むれば双六盤の上に立ち、一鞭を當つれば十丈の堀をも飛び越えるといふ驚くべき名馬でありました。天皇にはいたくこれを喜ばれ、諸臣を召し、

『昔支那に千里の名馬があつたといふことは聞いてゐるが、我國で天馬の出でたることを聞かぬ。今、朕が代に至つて、此馬が自然と出て來たのは吉凶如何であらうか。』

と問はれました。勿論、それは帝德の盛んなのを頌する爲であるとの御考へであらうと推した諸臣は、皆口を揃へて御祝詞を申上げました。その時、藤房が、遲れて其の場所に出て來ましたので、天皇には、更に藤房に向ひ、其の所存を述べよと命ぜられました。藤房は肅然として形を正し、

『天馬の日本に現れたと申すことは、これが始めてで御座いますから、吉凶善惡を申すことは六ケしう御座います。昔漢の文帝の時、一日に千里を行く馬を獻じたものが御座いました。公卿大臣、之を見て御祝ひを申上げましたところ、文帝はお笑ひになつて、吾、吉に行くには三十里、凶に行くには五十里、鑾輿前に在り、屬車後に在り、吾れ獨り千里の馬に騎つたとて、何處へか行かう。と、その費用を償うてこれを送り返

されたといはれて居ります。又、後漢の武帝の時、千里の馬と寶劍とを獻じたものがありましたが武帝には、馬に鼓車を挽かせ、寶劍を騎士に賜うたとあります。周の末に當り、八匹の天馬が現れましたが、穆王には之を愛して諸方を遊行なされ、政治を怠り給うたので、周室これより衰へたと申します。文帝や武帝は、天馬を退けて福を保ち給ひ、穆王は天馬を愛して、衰亡を招かれたのでありますから、天馬を御愛しになることは、よいことでは御座いますまい。』

と申上げましたから、諸臣、駭然として色をかへました。藤房は、少しも憚る色なく、更に膝を進め、涙をふるひ、

『恐らく方今、政道の正しくない爲に、この馬が現れて、人を蕩かさうとするので御座いませう。何故と申しますと、今日は大亂の後でありまして、民は疲弊し、天下は不安であります。政を執る人は、食事の暇をも吝んで民の訴へを聞き、諫臣は表を上つて、主上の誤を正すべき時でありますのに、遊惰の徒はひたすら樂しみに耽つて、世の治まるか否かを考へず、群臣は皆、主上に阿つて、國の安危を申上げませぬ。その爲に記錄所、決斷所には訴狀が山のやうに積まれて、少しも解決せられぬ有樣であります。そこで人民は呆れて誰も記錄所へ訴へ出る者がなくなれば、諸卿は世の中がよく治まつて、訴訟が減じたのだと考へてゐるのは呑氣千萬な話であります。元弘の大亂に、天下の士卒が擧つて官軍に屬しましたのは、功を立てて恩賞に與らうと思つたからでありますが、何時になつても行賞が定まらないので、皆憤慨して歸國致します。されば何よりも先づ行賞をなされて、士卒の心を慰めらるべきでありますのに、大內裏の造營を先になさつて、諸國の地頭に二十分一の稅をおかけになりました故、戰爭の費用の外に、又費えが出まして、いよ〳〵民の怨みを買つてをります。次に申上げたいことは、天運めぐり來つて、朝敵が亡びましたけれども、天下を靜めた功勞は、尊氏、義貞、正成、圓心、長年皆同樣でありますから、其の行賞も同じく、位も同じくなければなりませんのに、行賞甚だしく不公平であるばかりでなく、圓心は一旦守護職に任ぜられたのを、後で取り上げられ、舊來の本領だけとなりましたのは、甚だしい不當であります。たゞに不公平であるばかりでなく綸言掌をかへす如く變るのは、何事で御座いませうか。もしも今日、武家の棟梁たるべき者が出て來て、朝廷に反くことがありましたならば、朝廷を怨む天下の武士は、糧を負うて、招かざるに集まるでありませう抑々、德の傳はることは飛脚を以て命を傳へるよりも早いのでありますから、善い時には天馬の必要は御座いません。たゞ、萬一大亂が不意に起つた樣な場合には、この馬を用ふる便利が御座いませう。』

この侃々諤々たる諫言を聞し召された天皇には、いたく御機嫌を害ね給うた樣子に見えましたので、諸公卿は皆眞蒼になつて戰慄するばかりでありました。

遁世

其後藤房は、いくたびか諫言を奉りましたが、少しも容れられず、皇居の御造營は斷行され、日夜の宴遊も止みませんので、もはや臣たる道は盡し終つた、この上、世の亂るゝのを見るに忍びぬ故、世を捨てゝ

山に入らうと決心しました。建武元年三月十一日、主上には石清水八幡に行幸のことあり、藤房も大臣として供奉しましたが、今日最後の御伴と決心した藤房は、平素よりは特に意を用ひ、百數十人の家臣にことごとく盛裝せしめ、威儀堂々四邊を拂つて供奉しました。御神拜終つて、還幸の後藤房最後の參内をなし、それとなくいろ〳〵と忠言を奉つて、曉近い頃退出すると、そのまゝ車を家に還し、侍一人を伴うて、北山の岩藏といふところに住んでゐる、不二房といふ僧侶に頼んで戒を受け、髪を剃つて、出家の姿になりました。其時、漸く四十歳ばかりでありました。

天皇には、このことを聞召して、いたく驚かせ給ひ、父宣房を召して、

『急いで藤房を探し出し、再び政道を輔佐させよ。』

と仰せられましたので、それまで吾子の出家に氣付かなかつた宣房は大に驚き、泣く〳〵車を飛ばして岩藏に尋ねて行きますと、不二坊のいふには、

『其のお方は今朝までこゝにおいでになりましたが、行脚をなさるとのことで、何處へか御出になりました。』

と答へました。宣房は

『さては彼が精忠の志、つひに達せられぬことを知つて遁世したのであるか、可哀さうなことをした。』

と老いの涙にかきくれてをりましたが、ふと障子を見ますと、藤房の手蹟で、

住み捨つる山を浮世の人とはゞ
嵐や庭の松にこたへん

と一首の歌をかきつけてありました。

元弘以來、苦難を共にした藤房の、この遁世が、いかに大きなショックを天皇に與へ奉つたことでありませう。藤房の最後は今に至るも謎であります。建武の忠臣、其の最期の知られないものは、藤房だけであります。

大逆

藤房の遁世につぎ、果して禍亂は踵を接して起りました。曰く西園寺公宗の大逆、名越時兼の亂、北條時行の亂、護良親王の弑逆、足利尊氏の反亂、かくして天下は再び麻の如く亂れたのであります。

北條氏は鎌倉に亡びましたが、其の餘類は全國に遺つて居りましたから、近時の政治の腐敗、人民の不安士卒の不平に乘じて事を擧げようと計つたことは、當然すぎることでありました。中にも紀伊國飯盛山には佐々目憲法入道といふものが主將となり、その勢一萬、建武元年十月反旗を飜し、其の勢猖獗を極めたので、楠公はこれが討伐に從事するため、京都を退去されました。かくて十一月より正月に亙り、幾回かの戰鬪があつて、賊徒はつひに誅に伏しました。

西園寺公宗の大逆事件は、此頃に於ける最大の出來事でありました。西園寺家は、承久の亂の時、北條氏に內通したことがあるので、其れ以來北條氏と關係が深くあつたので、公宗にとつては、北條氏の失墜は、あまり好都合ではなかつたのです。公宗はまだ二十六歳の壯年でありましたが、大膽な野心家で、何とかし

て北條氏を再び立て、それによつて自分の地位を擁護しようと考へて居た矢先、彼の懐に飛びこんで來たのは、北條高時の弟泰家であります。泰家は鎌倉陥落の時、自害したと見せかけて潛かに遁れ、奥州に落ちましたが、其後都に上り、田舍侍が始めて召抱へられる體で、西園寺家に入つたのであります。大膽不敵なる公宗は、この泰家に、刑部小輔時興と僞名させ、密に相會して、陰謀を廻らしつつありました。かくて次第に四方の北條氏の與黨と連絡を取り、着々として反亂の計畫を進めました。其の方策は、時興(泰家)を京都方面の總帥として近畿の與黨を集める。其甥相模次郎時行を關東の大將として鎌倉を襲はせる。名越時兼を北國の大將として、北陸道の與黨を集めさせる。さうしてまづ、天皇を弑し奉り、それと同時に一擧に事を擧げる、といふ手筈であります。かくて各方面の準備が成つたので、ひそかに公宗の邸内に新らしい湯殿を建て、その上り場の板に仕掛をして、踏むと同時に落ちるやうにし、床の下に劍を植え、落ちたならば生命のないやうにこしらへました。かくして主上の臨幸を請ひ、御入浴をおすすめして、畏くも玉體を陷れ奉らうとはかつたのであります。さうして何氣ない樣子で參内し

『北山の紅葉が見頃で御座います故、一日、御臨幸下さいませ。』

と申上げました。天皇には御喜びになつて、日を定めて御臨幸のことに決しましたがその前夜の御夢見が大へん悪かつたので、躊躇なされてゐる時、にはかに、公宗に陰謀の企があるといふことを御知らせしたものがありました。そこで中院中將定平に、結城親光、名和長年を副へ、北山の西園寺邸を襲ひ、一網打盡に其の與黨を捕縛せしめ給ひました。かくて嚴しき訊問の結果、罪狀が明かになりましたので出雲に流罪に決し、名和長年に命じて護送せしめられましたが、長年は途中で之を斬り殺しました。これは建武二年八月二日のことであります。これは長年が、命令を誤解したのだともいひ、又長年が將來の禍源となることを恐れてことさらに殺したものであるともいひます。此の突發的な擾亂のため、京都市中には、諸方の兵が殺到し鼎の湧くやうな騒ぎでありましたが、皇居の四圍、諸門は、楠公麾下の精兵が、嚴しく警衛し、人を近づけなかつたので宮中には何の異變も起らなかつたのであります。

足利尊氏の反

護良親王弑せらる

これより先き、鎌倉には第八皇子成良親王を征夷大將軍とし、足利直義を執權として、關東を治めしめ給ひました。關東には北條氏の餘類多く殘つて居り、何時どの樣なことがあるとも分らぬ故、それを威壓する爲であります。

西園寺公宗の陰謀が事前に發覺し、其の與黨が誅に伏したので、京都附近に集まつて反亂に參加しようと待ち構へてゐた平氏の武士は、先を爭うて東に走り、信濃の北條時行と、北越の名越時兼に寄りました。越中、能登、加賀等の武士、多く時兼に從ひ、勢ひ振ふとの報があつたので、諸公卿會議し、正成に征討のことを命ずるがよいとの意見が多くありましたが、足利尊氏はこれを聞いて、正成の勢力增大を恐れ、准后を通じて朝議を動かし、遂に正成の出征を中止させ、桃井直常に征討軍司令を命じました。正成は莫大の軍費を整へて桃井に贈り、其の勞を謝しましたので、直常は感涙にむせんだといふことであります。さうして、行く先々で、

『楠公があとから來られる。』

と宣傳させたので、計略うま〳〵と當り、敵は戰はざるに潰え、容易に北國を平定しました。當時、楠

の名が如何に天下に恐れられてゐたかは、此の一事を以ても知ることが出來るでありませう。

北條時行は高時の第二子で、鎌倉滅亡の際、諏訪盛高が潛に之を抱いて遁れ、信濃の諏訪に走つたのでありました。北條氏の殘黨、これを擁立して信濃に兵を擧げましたので、近國の武士競うて付き隨ひ、數萬の大軍となりました。さうして小笠原貞宗を一戰に打ち破り、武藏に入り、小山秀朝、新田四郎等を破り、進んで鎌倉に迫りました。其の勢ひ甚だ急で、足利直義は防戰の遑もなく、這ふ〳〵の體で鎌倉を逃げ出しました。

前にも言ひましたやうに、この直義といふ男は、實に惡黨で、良心の一片も持ち合はさぬやうな人間でありました。さうして、凡ての惡黨に通有なる如くその遣り方が、實に拔け目がないのでありました。此の危機一發の場合に、家臣淵邊伊賀といふものを呼び寄せ、

『味方が無勢で逃げ出すには逃げ出すが、やがて鎌倉を取り戻すことは何でもない。たゞ氣がかりなのは、兵部卿親王だ。あのお方は、永久に足利家の敵となるお方だ。このどさくさ紛れに御生命を取り奉らうと思ふ。大急ぎで藥師堂へ走つてゆき、宮を刺し奉つてくれまいか。』

といひました。淵邊はもとより何事も辨へぬ荒武者でありましたから、直に走つて藥師堂へゆきました。

只今、鎌倉宮の裏手に、護良親王の幽せられ給うた土牢のあとといふものがあります。あの土牢は後人の造つたもので、親王は土牢においでになつたのではなく、座敷牢に監禁されておいでになつたのだといふ說があります。如何に順逆を辨へざる直義といへども、まさか親王を土牢に幽閉し奉つたとは思へないので、恐らく其の說が正しいでせう。兎に角、淵邊が御牢の前に參り、御輿を据え、

『敵が迫つて參りました故御迎へに參りました。』

と申上げますと、親王には、

『お前はわしを殺しに來たのであらう。』

と立上つて、淵邊の大刀を奪はうとなさつたのですが、長い間の御蟄居で、御足が自由に動かなかつたのを、淵邊すばやく御膝に斬りつけ、倒れたまふたところを、のしかかつて御顎をかかうとしたところ、頸をちぢめて、刀の刄をしつかりと御咥へになりました。淵邊は、刀を奪はれてはかなはぬと、力を極めて引いたので、刀の尖が折れてしまひ、脇差しをぬいて御胸を刺し、次に御首を搔き落しましたが、刀の切尖、尙御口に止まり、御目をくわつと開いて、生きたもののやうに淵邊をにらみつけておいでになるので、怖ろしさに御首を藪の中にすてて逃げだしました。元弘以來、國家のため具さに辛酸を嘗め、皇儲の貴さを以て、士卒と勞苦を共にし、つひに中興の大業を成しとげ給うた親王も、讒を防ぐに由なく、かかる果敢なき最後をとげ給うたのは、いかなる前生の御因緣かと、まことに御同情にたえぬ次第であります。このことを傳へ聞いた時の楠公の胸裡はどのやうであつたか、想像にあまりあります。

かくて北條時行は鎌倉を占領し、足利直義は成良親王を奉じ、箱根を越えて西に走り、三河國矢矧宿に至つて、親王を京都に還し奉ると共に、軍狀を奏上しました。茲に於て、足利尊氏が、いよ〳〵其の大望を達すべき好機は迫つて來ました。

傲慢不遜の奉答

朝廷では、直義の報告に接すると、直ちに會議が開かれ、征討の任を何人に負しむべきかが詮議されました。それには鎌倉征討の功を擧げた義貞が最も適任であるといふことには、誰も異議がなかつたのですが、胸に一物ある尊氏は、裏面に策動して朝議を變更せしめ、尊氏を以て之に任ずべしと決定させたのであります。そこで勅使が其旨を尊氏に傳へたところ、尊氏の答へは實に傲慢不遜なものでありました。多少の誇張はあるかも知れませんが、「太平記」によると、其の要領は次のやうであります。

『元弘の亂の始め、尊氏が味方に參りました爲に、天下の士卒皆官軍に屬して、勝を一時に決したのであります。然れば今日の天下統一は、ひとへに尊氏の手柄であります。抑〻征夷大將軍の任は、代々源氏、平家の輩が其の功に依て賜はることになつて居りまする故、どうか尊氏に其の御任命あらんことを切望致します。次には、亂を鎭め、治を謀りますには、士卒の功を速に賞することで御座います。若し一々注進を致して居りまして、勅許を經なければ行賞が出來ぬといふことでありますと、道は離れて居ることでありまするし、急なことに行かず、士卒を勵ますことが出來ませぬ。それ故關東八個國の管領の位を許され、自由に行賞の出來ますやう勅裁を下されますならば、早速出征致しますで御座いませう。此の兩つの條件を御許しなければ、どうか外の方に御命じ下さいませ。』

行賞のことは、まさに當時の政府の痛手を突いたものでありましたから、關東八個國管領のことは、どうしても許すより外はあるまいとの議論が勝を占めました。しかし、征夷大將軍のことは、容易ならぬことでありますから、多少の議論も出たらうと思はれますが、治亂を達觀する明なき公卿たちは、押し切つて反對するものもなく、つひに征夷大將軍のことは、今回の軍功如何によつて定める、關東管領のことは差支ないといふことになり、あまつさへ、尊氏の高の字を改め、天皇の御諱の一字を賜うて、尊氏と改名せしめられました。此の優渥なる天恩を思うたならば、尊氏たるもの粉骨碎身して王事に盡すべきでありますのに、彼の心には依然として虎狼の慾を挿んで居りました。一說には、この時、尊氏の奏上に對して、未だ勅許なきに、ほしいまゝに京都を發したのだともいひます。或はその方が眞實に近いでありませう。

虎は野に放たれました。天下の運命、すでに此の時に決したといつてもよいのであります。

尊氏、大命を拜して東征すと聞いた沿道の武士は、われも〳〵とその麾下に馳せ參じ、忽ちにして數萬の大軍となりました。これらの武士は皆新政府に失望し、尊氏に附屬して事を成さうとの野望を懷いたものの みでありますから、其の勢ひ極めて猖獗であります。尊氏これらの兵を率ゐて、八月八日佐夜の中山に北條氏の軍と戰ひ大に之を破り、更に箱根の水飲峠、相模川に連勝し、八月十八日大軍堂々として鎌倉に入り、北條時行は辛うじて遁逃しました。朝廷に於ては、未だ尊氏の叛心あることを知らず、勅使を遣はして尊氏を賞し、且つ京都に歸還すべきことを命ぜられましたが、例の直義は、

『此の機會を逸しては、再び斯ういふ時は來ますまい。京都に御還りになることは斷然反對であります。鎌倉に幕府を開き、天下に號令なさるがよろしい。』

と固く尊氏の歸京を止めました。事毎に直義の獻策を用ふる尊氏は、つひに其議に隨ひ、ほしいままに自ら征夷大將軍と稱し、鎌倉に幕府を開き、關東八箇國を管領し、新田義貞の領地をことごとく沒收して、之を將士に頒ち與へました。同時に全國に檄を飛ばして、新田義貞征討の必要を宣傳したのであります。義貞の義兵を擧げた時、關東の武士は爭うて之に從ひましたが、彼等にとつては、主權者が義貞であらうと尊氏であらうとどちらでもよいので、戰後、尊氏が義貞に超えて恩賞を受け、大臣に任ぜられたといふことを聞くと、爭うて足利氏に阿附し、鎌倉攻の時、下野に遁げて居た尊氏の二男千壽王といふ赤ん坊が、戰後鎌倉に還つて大藏谷に居ることになると、その赤ん坊の御機嫌伺ひに出るものが引きも切らぬ有樣でありました。當時の武士たちには、かうした利己主義者が甚だ多かつたのであります。かういふ有樣でありましたから、關東一帶は、今や全く足利氏の確實に占有するところとなつたのであります。

尊氏と義貞の上疏

尊氏、鎌倉に據つて反す、との報道が京都に達しますと、主上には逆鱗あらせられ、

『尊氏大功ありと雖も、不義を行へば捨て置くべきではない、直ちに討伐するがよい。』

と仰せられました。しかし諸公卿は、事實が未だ確かでないのに、功臣を伐つことはよくないと主張しましたので、朝議を決し兼ねてゐる時、細川和氏が使者となつて、尊氏より上奏文を奉呈しました。それは新田義貞の罪を擧げて、討伐の勅許を請うたものであります。然るに、新田義貞は早くも之を聞き知り、尊氏の罪狀を列擧して、誅伐の勅許を請ふべく、上奏文を奉呈しました。

尊氏は既に護良親王といふ目の上の瘤を除きました。次いで自分の野望を妨げるものは義貞であります。義貞は自分と同じく源氏の名家であり、しかも中興の元勳であつて、天下の輿望を荷つて居るのであるから、決して自分に下る筈はない。兩雄竝び立たざるの道理、義貞を除かずしては、自分の望みを達することは出來ない。楠も大敵であるが、楠は閥族的背景に於て劣るのみならず、官位も低く、差し當つてどうといふこともない、先づ義貞を除くことが第一の仕事である。そこで、上疏を奉つたのでありますが、其の上疏たるや、まことに出鱈目で、誰が見ても拙劣を極めたものであります。其の要旨をいへば、義貞が鎌倉を攻めたのは、敢へて忠義の志があつたのではない。北條氏の怒を買うて、窮鼠猫を嚙むの擧に出でたものである。彼は尊氏が京都で叛徒を討つたと聞いて、これ幸ひと旗を擧げた。しかも鎌倉の陷落は彼の功ではない。尊氏の子義詮（三歳）が下野國から出て來たので、其の威風を望んで近國の兵が付き隨ひ、遂に鎌倉を落したのである。といふので、よくもこんな白々しいことを上奏したものであります。

義貞の疏狀は、これに反して、文章も堂々たる名文であり、理路整然として、尊氏を痛擊し、完膚なからしめて居ります。先づ、

『太平の初め、山川震動し、地を略し、敵を拉ぐ。南に正成有り、西に圓心有り、加之、四夷蜂のごとく起り、六軍虎の如く窺ふ。此時尊氏、東夷の命に隨ひ、族を盡して上洛す、潛に官軍の勝に乘るを看て死を免るるに意有り、然れども猶心を一遍に決せず、運を兩端の處に窺ふ。名越尾張守高家、戰場に於て命

を墜すの後、始めて義卒と丹州に軍す。天誅、命を革むるの日、忽ち鷸蚌の弊に乘じて、快く狼狽の行を爲す、若し夫れ義族京を約め、高家死を致すに非ざれば、尊氏猶鈇鉞を把つて强敵に當らんや。』

と、彼の狡獪を痛罵し、論を進めて、

『義貞、朝敵追罰の綸旨を賜はりて初めて上野に起るものは五月八日也、尊氏、官軍の殿に付いて、六波羅を攻むるは同月八日也、都鄙相去ること八百里、豈に一日の中に言を傳ふることを得んや。而るに義貞、京洛、敵軍の破れたるをきいて、旗を擧ぐるの由を上奏に載す。謀言眞を亂る、豈に然らずや、其の罪一。尊氏が長男義詮、わづかに百餘騎勢を率ゐて鎌倉に還り入るは六月三日なり。義貞、百萬騎の士を隨へて、立ろに凶黨を亡ぼすは五月廿二日也。而も義詮三歳幼稚の大將にして合戰を致すの由、上聞を掠むるの條、雲泥萬里の差違、何ぞ言ふに足らん、其の罪二。』

と、彼が妄言を破し、つゞいて、尊氏の横暴專恣、勅命に違へるを難じ、更に兵部卿護良親王を弑殺せるを擧げ『大逆無道千古此の類を聞かず』と斷じ、之が誅伐を請うたのであります。

天皇には、此の兩疏文を公卿に下して、詮議せしめ給ひました。日和見連中の多く、意氣地なしの多い公卿たちのこととて、明瞭な意見を述べるものもなく、愚圖々々してゐた時に、坊門清忠、ひとり敢然として進み出で、

『今、此の上奏文を見まするに、義貞の擧げました尊氏の罪八個條、一々其罪輕からじと存じますが、殊に兵部卿親王を弑逆したりとのこと、眞實でありますならば、尊氏、直義の罪、遁れ難いと存じます。但し、片言を以て訴を定めることは出來ませぬ故、暫く事實の明かになるのを待つて決定なさるるがよろしいと存じます。』

と述べたので、諸卿其の議に同じ、其の日の會合は終りました。然るに間もなく、護良親王の御世話をして居つた南の方といふ女房が、鎌倉から歸京し、宮の御最期の有樣を奏上しましたので、さすがの、天皇もいたく驚かせられ、漸く尊氏の異心に御心付きになつたところへ、九州、四國等から、尊氏擧兵の檄文數十通を京都へ提出しましたので、さてはいよ〳〵叛心あらはであると、討伐の議が決定しました。すなはち、尊良親王を東國管領に任じ、新田義貞を大將軍として、尊氏討伐に任ぜしめたのであります。

當時諸公卿の中には、楠正成、名和長年を副將として出征せしめることを主張したものがあり、正成も亦、中院定平を介して、今回の戰は非常に重大な戰であつて、萬一敗れたならば、天下の大亂となるに違ひないから、全力を盡して之を平定しなければならぬ。自分も新田の一部將として働くから、是非出征を命じていただきたい、と奏上したのですが、義貞は、

『東國鎭撫のことは自分が引受けるから心配に及ばぬ、しかしながら、西國、四國等にも敵に通ずるものは多いのであるから、楠、名和等の諸將は、京都を守護せらるるがよい。』

と主張したので、つひに楠公の希望は容れられなかつたのであります。成る程、表面、義貞のいふ所は、如何にも肯かれる理由がありさうですが、あまりに自己を高く評價し過ぎて、思慮周到を缺き、猪勇の嫌ひがなかつたか。而して、尊氏のねらつたところにうまうまと陷つたのではなかつたか。尊氏にとつては、官

軍の諸將、協力一致して大擧東下することは最も怖るべきことであり、先づ義貞を擊つて之を破り、次第に他の諸將に及ぼすといふ各個擊破の戰術が最も得策であつたのでありますから、義貞の所爲は、まつたく尊氏の希望通りに行つたのであります。官軍の敗因は、全くそのチームワークの缺けてゐる爲で、そのチームワークの拙いといふ點については、主將義貞が最も多くの責任を負はなければなりますまい。

尊氏一片の良心

十一月八日、新田義貞、朝敵追討の宣旨を賜りて參內し、錦旗節刀を賜はりて退下、二條高倉なる尊氏の邸に矢を射て威を示したる後、一族郎黨七千餘騎、宇都宮公綱、千葉貞胤、菊池武重、大友貞載、佐々木高貞、其他諸家の兵六萬七千、尊良親王を奉じて、東海道を下りました。別に大智院宮を大將として、東山道軍を組織し、翌日京を發せしめ、又、鎭守府將軍北畠顯家に勅して奧州の軍を發し、鎌倉を攻擊せしめ、三方並進して足利氏を討つの計畫でありました。

尊氏、悖恩といへども一片の良心がないわけではない。彼は自己保存のために、幾多の惡逆を重ねましたが、流石に、御醍醐天皇の厚恩に對しては、感銘して居つたでありませうから、今、天皇の震怒を買ひ奉つたことについては、定めし恐懼したでありませう。且つ、彼は、源氏の棟梁である立場からして、朝敵の汚名を受くることを極端に恐れて居りました。隨て、義貞が錦旗を奉じて東下するとの報達し、直義、仁木、細川、高、上杉の諸將が、軍略を議すると、彼は默然として答へず、暫くしていふには、

『自分は譜代弓箭の家に生れ、僅に源氏の名を殘すといへども、承久以來、北條の下に屈服して、恥を忍んでゐたのを、今日、絕えたる將軍職を繼ぎ、廢れたる位を興し、從三位上に昇つてゐるのは、自分の微功に依るとはいへ、君の厚恩に依るのである。恩を戴いて之を忘るゝは人の道ではない。抑々今、君の逆鱗あるは、兵部卿親王を失ひ奉つたのと、諸國へ軍勢を催促したとの爲である。これは、自分の計つたことではないから、其旨を謹んで申上げたならば、御疑ひを晴らされて、御咎の許さるゝこともあらう。諸君は、諸君の思ふ通りにし給へ。自分は、君に對して、弓を引き、矢を放つやうなことは出來ぬ。それでも御許しがないといふならば、剃髮染衣の姿となつて、お詫を申上げるばかりである。』

と、いたく憂鬱な樣子で、障子を引立て、室に入つてしまひましたので、諸將は甚だ失望落膽してしまひました。其の中に、官軍が次第に進んで、遠江まで來たといふ知らせが達したので、上杉、細川、佐々木等の諸將は、直義を訪問し、

『將軍の仰せになることであるが、このまゝ公家の世の中になつたならば、われ〳〵は奴隸同樣になつてしまふ。此際、將軍の命に背いてもかまはぬから、貴下が官軍と戰つて下さい。左すれば私たちは皆御伴いたします。』

と勸めました。これは直義の希望通りの言葉ですから、大いに喜び、

『では、左樣いたさう。』

と直ちに一族を率ゐて鎌倉を出發しますと、もとより戰爭を期待してゐた鎌倉在留の諸武士はもとより、關

東諸國の武士、われも〳〵と其の後に從ひ、數萬の大兵となつて、三河國矢矧川まで進出しました。然るに官軍の勢ひ甚だ強く、足利勢大敗して鷺坂に逃れ、ここでも亦敗れて、手越河原に退き、三たび敗れてつひに鎌倉に退きましたから、賊兵中官軍に降るもの甚だ多く、官軍の勢ひ甚だ振ひました。

兵は神速を貴ぶといひます。持久戰の可なる場合と、速戰卽決の可なる場合とありませうが、野戰に於て攻擊軍の立場にある時、神速を貴ぶのは當然でありませう。義貞は凡將ではなかつたが、其の點に於て、源義經や、豐臣秀吉などの、天才的用兵に比べると、ほとんど問題にならないやうであります。此の時、勢ひに乘じて直に鎌倉を衝いたならば、足利氏の滅亡は、掌をかへすよりも易いことであつたでせうに、事、茲に出でず、東山道、奥州の兵の集るのを待つて、悠々一箇月を空費し、直義をして敗兵を集め、陣形を立て直すの餘裕を與へました。しかも、箱根の天險を越えて、小田原に出でたならば兎も角、箱根を前にして伊豆の三島に逗留したのは、如何なる理由であつたか、われ〳〵素人から考へても、いかにも拙策であつたやうです。但し何か其處に祕められた理由があつたかもしれません。

直義の奸策

駿河より敗れ歸つた直義は、尊氏の邸に入つて軍狀を報告しようとすると、意外にも門扉は固く閉ぢられ、人のけはひもない。荒らかに戸を叩くと、留守番が出て來て、

『將軍には、矢矧の合戰のことを御聞きになり、建長寺へ入つて御出家なさるゝとのことで御座います。』

と答へました。直義大に驚き、

『なに、出家なされたとな。』

『はい、皆樣がお止めになるので、元結を御切りになつたまゝで、未だ髮はお剃りにならぬとのことでありますが、御決心が固く、つひには御出家なさるであらうとのことであります。』

『それは大變だ。斯うしては居られぬ。』

と、直義は諸將と會議した結果、上杉重能の意見を採用し、勅書を僞造し、たとへ、出家遁世しても、あくまでも尊氏、直義等の一族を探し出して誅罰を加へよとの旨を記し、それを携へて建長寺に行き、

『これは矢矧の合戰で敵の死骸の中から發見した勅書であります。この通り、出家遁世しても御許しがないといふ叡慮でありますから、どうか出家の儀を思ひ止り下さつて、一族の者を御助け下さいませ。』

と涙を浮べていひました。尊氏も、眞逆に勅書の僞造をしたとは想像しなかつたのでありませう、つひに直義の言に動かされて、道服を脫し、錦の直垂に着かへました。このことを聞いて、官軍に降らうか、國に逃げようかと、決しかねてゐた諸國の武士皆、士氣再び振ひ、戰備を整へました。

義貞の戰略的失敗は前にも言つた通りでありますが、義貞の麾下に附屬した、菊池、宇都宮、千葉其他の名將が、此の軍略に同意して、口を噤んでゐたのも不思議でありました。同時に、直義の周圍に、姦智に長じたものが多くあつて、苦肉の策をめぐらし、つひに尊氏を動かしたことも不思議でありました。運命といへば、運命でありませうが、義貞が勝に怛れて油斷をしてゐたのに對し、一方窮鼠かへつて猫を嚙む直義等

の、必死の努力が、萬々決したと見えた勝敗の運を覆へしたともいへませう。さるにても、必敗のどん底に
まで陷りながら勇氣を失はず、つひに頽勢を挽回した直義の不撓不屈の精神は、悪黨ながらえらいものです。
十二月十一日、尊氏、直義はいよ〳〵鎌倉を發して箱根に向ひました。尊氏は、竹之下（御殿場驛から東
北四キロメートル）に向ひ、直義は箱根峠に向ひます。義貞も亦兵を二分し、自らは箱根に向ひ、弟脇屋
義助は尊良親王を奉じて竹之下に向ひました。かくて十二日正午より猛烈なる戰鬪が始まり、箱根峠に向つ
た義貞の軍、大いに賊兵を破り、まさに進んで鎌倉を衝かうとするまでになりましたが、竹之下の官軍は、
先陣爭ひをしたために賊に破れ、加ふるに鹽冶高貞、大友左近將監等賊に内通して反旗を飜し、前後より
挾擊したために、大敗したので、戰機一轉し、官軍終に支ふること能はず、三島に敗退しました。十三日、
三島に於て尊氏の尖兵を擊退し、敗兵を收めて駿河に入り、天龍川を越え、矢矧に至つた時は、逃亡するも
の相踵ぎ、さしもの大軍も僅に數千騎を算するのみとなつたので、宇都宮公綱の議を納れ、京都に還るに決
した時、京都よりも義貞召還の命が下りました。

天馬のみじめな最後

義貞が東征してゐる間、正成は名和と共に京都の警備に任じて居ました。靜に天下の形勢を觀望してゐる
楠公の眼に映るものは、全國に瀰漫してゐる不穩の空氣でありました。此際、もし官軍にして敗れんか、滿
腔の不平を懷いて、待機の姿勢を執つてゐる全國の武士は、相呼應して立つに違ひないのです。唯一の頼み
は、義貞の勝利でありました。義貞とても凡將ではなく、其の下には菊池を始め多くの勇將が控へてゐるこ
とであるから、左樣易々と破られることはあるまいとは、楠公の考へでありました。然るに豫期に反して、
義貞は、最後の五分間に於て敗を取りました。もしも、自分が、許されて義貞と共にあつたならば、決して
其樣な敗は取るまいと、思はれたことでせう。楠公の無念さ、想像に餘りありです。
此時あだかも讃岐の高松頼重から、細川定禪が尊氏に應じて反旗を飜したと急報して來ました。朝廷議
して正成に征討のことを命じましたが、正成は、勅使に對し、
『四國追討のことは暫らく御待ちなされて、天下の動靜を御覽下さい。』
と答へ、更に其の理由を説明しました。四國の朝敵を討つことはよいが、中國、北國、九州にも朝敵は蜂
起するに違ひない。自分が四國へ渡つてしまつたら、萬一、朝敵が京都へ迫つた時に困るであらうといふの
です。天下の形勢が如何なつてゐるかを知らず、迂濶千萬な公卿は、
『中國、九州、北國に朝敵が現れるとは本當か。』
と訊ねました。正成は、諄々として天下の形勢を説き、護良親王謀殺以來の尊氏の非違、赤松圓心が播磨の
守護職を故無くして奪はれたるを始めとし、行賞の不當の爲に朝家を怨む武士の多いこと、尊氏がそれらの
武士を巧に操縱して恩を賣つてゐること等を列擧し、全國に亙り朝敵となる可能者を指摘し、中國や九州か
ら、何等の報告のないのは、朝敵が無いからでなくて、朝敵が多いから、報告するものがないのであるとい
ふことを述べたので、流石呑氣な公卿たちも成る程左樣かと考へました。其の翌日、兒島高德より早くも四

國に朝敵蜂起すとの注進があつたので、滿廷の公卿皆正成の達見に驚くと共に、今更のやうに狼狽し、正成を召して、當面の方策を諮詢するに決しました。茲に於て正成參内し、諸公卿列席の上で、舊來の政道の非違を擧げ、將來の方策を述べ、至誠を披瀝して奉答したので、天皇にはいたく御感あり、尚一層忠勤を勵むべき旨御沙汰があつて退出しました。

間もなく、全國各地から、賊徒蜂起すとの報が、櫛の齒を引く如く至つたので、朝廷震駭、爲すところを知らず、天皇にも染み〴〵と正成の言葉を思ひ合はされ、御後悔遊ばされたが、もはや時があまりに遲かつたのであります。さて、此時のことですが、「太平記」の傳へるところによると、義貞が恰も尾張に居つて、敵の追擊を邀へようとしてゐると、一と先づ都に召し還すがよからうとのことで、匹地九郎といふものに、例の龍馬を賜ひ、使に立てられました。此の馬ならば、尾張の國まで日歸りにでも行くであらうといふことでありましたが、十二月十九日の朝京を立ち、午頃に近江の愛智川といふところに着くと、俄に病に罹つて死んでしまつたので、匹地は、仕方なく、外の馬に乘り替へて行きました。人々は今更のやうに、藤房のことを思ひ出し、深い感慨に耽るのでありました。

鎧袖一觸

正成は、此の時、最後の手段として、自ら兵を率ゐ、東下し、義貞と共に敵を邀擊しようとしましたが、朝廷では正成に京都を去られるといふことに非常な不安を感じ、之を許さなかつたので、已むを得ず領内を固め、最後の根據地としようと、遽に國に歸り、多數の城塞を築き、戰備を整へた上、五千餘騎を以て都に歸らうと、山崎に屯してゐますと、斥候が來つて、赤松圓心、細川定禪の聯合軍が、須磨に向つて進擊中であるとの報を得たので、直に山崎を發して西に向ひました。赤松圓心は、既に述べたやうに、中興の元勳の一人でありましたが護良親王と特別な關係があつたので、准后藤原廉子の忌憚をうけ、一とたび賜はつた播磨守護職を奪はれたため、不平滿々であつたのを、尊氏巧みに懷柔して、自分の黨與としてしまつたのであります。彼等は此時、備前、備中、但馬の兵一萬を率ゐ、摩耶山に城くべく、生田の森に進出したところ、楠が來襲するといふ風說があつたので、

『なに、楠が來ると。馬鹿なことをいへ。楠は昨日京都へ歸つたばかりだ。今日、茲へやつて來る筈はない。』

と多寡をくゝつてゐると、先陣の諸隊俄に亂れ、

『楠だ、楠だ！』

と雪崩を打つて敗退したので、大に驚き、俄に起つて本隊を進めやうとしましたが、此時金鼓天に響いて楠軍急襲し、陣形を整へる遑もなく、散々に敗れ、多數の死傷を遺棄して敗退しました。楠公の前には、赤松の如きはまさに鎧袖一觸にも足らぬのでありました。これは十二月二十八日のことでありました。

茲に於て、正成は兵庫の警備を嚴にし、敵の首級四百餘を獲て尼崎に歸り、翌日、京都に還りましたが、其の途中で、足利尊氏の使者二人が行き逢ひ、尊氏の手紙を呈しました。

『なに尊氏の書面とな。その樣なものは見るに及ばぬ。お前が使者に逢つて、返しなさい。』と、譽田左兵衞といふものに應對をさせたが、使者は、逢つて、直々に申上げたいといふので、それではと人拂ひをして、二人を引見しました。使の者がいふには、

『尊氏公今度上洛あることは、ひとへに逆臣義貞を除かん爲であつて、朝廷に敵するものではありません。どうか楠公にも、尊氏に御味方あつて、新田を亡ぼすため力を協せていただきたい。さうして、畿内、南海、近江、伊賀、伊勢等を管領なさつて朝家を守護され、尊氏と共に天下を治めて下されば、まことに仕合せであるとの御言葉でございました。くはしくはどうか、御手紙を御覽下さいませ。』

どう返答をするかと、恐る〳〵正成の顏を見上げてゐる使者の顏を一瞥した正成は、冷かなこと氷の如く、

『今後の見せしめに、お前達を斬つて捨てたいのであるが、不愍であるから許してつかはす。早々歸つて尊氏に言へ。國や、土地が欲しいのなら、正成は尊氏などの力を借りる必要はない。正成の欲するところは、富貴や榮華ではない。正義である。』

この一言に、使者も返す言葉なく、悄然として去りました。正成翌日參内して、軍狀を奏し、また尊氏の書狀を天覽に供へたので、尊氏の狡獪にます〳〵驚かれたといふことであります。

兵站の完備

建武三年（延元元年）の春は明けましたが、朝廷には節會の御催しもなく、明け暮れ防備の軍議に忙しくあります。又しても戰爭といふので、市民たちは、極度に慄え、家財什寶を負うて、山林に避難するもの引きも切らず、騷然、雜然、紛然として、混亂を極めました。正成は、軍略を問はれて述ぶるやう、

『敗殘の味方を以て、敵の大兵を平地に邀擊することは困難であります。此際最もよい方策は、一旦叡山に行幸あらせられ、官軍は三方の山地に占據し、賊を洛中に誘ひ入れることであります。而して淀の川尻を占領して敵の糧道を斷ち、敵の士氣の沮喪するに乘じて、賊を掩擊するならば、勝を得ること疑ありませぬ。』

この軍略は、最後の場合に處する必勝の策であつたが形式をのみ重んずる公卿たちに容れられず、勢多より、宇治川に亙つて、敵を防禦することとなりました。しかも結局最後は、楠公の獻策通り、山門行幸、敵兵入洛して之を山上より掩擊するといふ結果になつたのですから、最初から楠公の策に從へばよかつたものを、迂遠なことをしたものです。

兵器の發達した今日とはちがひ、弓矢と刀槍とより外にはなかつた其頃にあつては、京都といふところは、かなり要害の土地でありました。京都は北から東にかけて山に圍まれ、殊に其の北方の山々は急峻を極めて、此方面より侵入することは絕對的に不可能であります。而して、東方の山地は、東にその外廓を琵琶湖及び宇治川によつて守られて居ります。宇治川は勢多に發し、名にし負ふ大湖の水が、一瀉千里海に注ぐのでありますから、其水量の豐かなると、水勢の早いことと、水深の深いこととは、他に例がない。しかし、東より來つて京都を侵すものは、必ず之を突破しなければならぬのであります。

官軍の主力は新田義貞の率ゆる一萬餘人で、淀、大渡を防ぎ、名和長年は、三千餘人を率ゐて勢多を守り、楠正成五千餘人を率ゐて宇治を守ることとなりました。菊水の旗、颯爽として河水に映じ、幾萬の敵ありとも、ことごとく河底に葬らん意氣を示して居ります。正成は此時、楫の島、小島ケ崎、平等院一帶に亙る民家をことごとく燒き拂ひ、敵の宿營を奪ふと共に、遠近諸郡村の糧秣をことごとく沒收して、敵をして糧を得せしめぬやうにしました。腹が減つては戰爭は出來ぬといふのは、古今の金言で、いかに精鋭なる兵士といへども、兵粮なしでは戰へませぬ。故に兵站の完備といふことが、戰勝の大原因なのですが、楠公は特に此點に用意周到でありました。千早の籠城が長續きしたのも、兵站が完備してゐたからであります。かくの如く味方の兵站に周到な注意を拂はれた楠公は又、敵の兵站を薄すからしめることによつて、戰はざるに敵を屈することに長じて居られました。尙、此時のことですが、楠公には、あらかじめ今回の戰爭が山門行幸のこととなるべきを豫想し、江州一帶特に足利氏の領地より奪ひたる兵粮六千八百餘石、大豆七千餘石を圓宗院に藏め、又、大津の兵粮三千石を、園城寺の賊徒に奪はれざらんため、先んじて坂本に運び、尙近鄕の庄屋等、兵を犒はんとする篤志家には、ことごとく兵粮に立替へて貰ひ、其上多數の米穀を買上げて、比叡山上に二千八百石を藏めたとのことで、これが官軍の士氣を盛んにしたこと一通りでなかつたと共に、洛中に入つた賊徒は、食糧の缺乏のために、士氣沮喪したことも敗因の一つであつたといひます。

それは後の話とし、足利尊氏は正月元旦既に關東、東海の大軍を率ゐて京師に迫りました。其の一般方略としては、尊氏自ら主軍を率ゐて、宇治に向ひ、直義及高師泰をして勢多を攻めしめ、畠山高國、吉見三河守をして淀、芋洗に向はしめたのであります。それと同時に、細川定禪と赤松圓心の聯合軍が、西より攻め上つて山崎から京都を衝かうとしたので、官軍は洞院按察使大納言、脇屋義助其他七千餘騎を率ゐて防禦に當ることとなりました。

魔印の如き菊水の旗

勢多方面の戰はすでに正月元日から始まりましたが、名和長年よく禦ぎ、賊勢甚だ振はぬ有樣です。正月廿日に至り、尊氏の本隊宇治に迫り、其の一枝隊は畠山高國の下に、先づ宇治の官軍に第一矢を送りました、これを最初として、晝夜五日間に亙り、必死の攻擊を行ひましたが、相手は名に負ふ楠麾下の精兵のことととて、まるきり齒が立たず、賊兵は一歩をも進めることが出來ぬ有樣であります。これは尊氏にも豫想し得られたことで、彼は當面の敵が楠であることを知ると、到底こゝを突破することの不可能なるを知り、俄に戰容を變へ、仁木、桃井、土岐、武田其他の部將に二萬餘騎を付して、宇治に遣し、敵を牽制せしめて置き、自ら本隊を率ゐて、正月八日淀に向ひました。菊水の旗は、魔印の如く、呪符の如く、賊膽を寒からしめたのでありました。

楠公の鋭鋒を避けて大渡に向つた尊氏の本隊は、九日より戰端を開き、義貞の本隊と激しく矢を交へました。賊軍は、附近の民家を破壞して筏を造り、之に乘つて河を渡らうとしましたが、河中には豫め無數

の亂杭を打つてあつたので、盡く之に遮られて進まず、官軍の矢が之に集中したので概ね射殺され、つひには筏が破壞して溺死するもの數百人に及びました。後には、橋桁ばかり殘つてゐる橋の上を渡らうとして、押し合ひ、へしあつてゐる中に、橋桁が崩れ落ちてこれ亦多數の溺死者を出しました。今日の如く、工兵の發達してゐる時代ならば、宇治川の如きも容易に架橋することが出來るでありませうが、當時の戰爭では、敵前で架橋することなどは不可能なことでありました。かくて戰ひは十日に入りましたが、此日赤松、細川の聯合軍は、精鋭を盡して山崎に迫り、脇屋義助等の官軍を擊破しましたので、新田軍は腹背に敵を受けることとなり、京都への退路を遮斷されるやうな有樣となつたので、つひに蒼惶として退却しました。此時、新田に從つてゐた宇都宮公綱は、助からぬと見て足利に降りました。

楠の薫り敵將に及ぶ

山崎、淀の官軍が敗れたと聞いて、朝廷では今更のやうに狼狽し、楠公最初の獻策の如く、主上には神器を奉じて比叡山に行幸遊ばされましたが、あまりのあはたゞしさに、幾多の貴重品も宮中に遺されたまゝでありました。勢多、宇治の官軍も、かうなつては仕方がないので、守りを捨てて退き、比叡山の東阪本に集中することとなり、賊軍は滔々として京都に入りました。此時のことですが、楠公の本軍、北に還らうとすると、尊氏麾下の桃井直常等の大集團と山科に遭遇しました。桃井は今は賊となつたが、嘗て楠公の教を受けた者で舊知の中であつたので、楠公は軍使をつかはし、

『これより皇居を守護し奉る。こゝで戰を交へてもあまり花々しい軍も出來ない。追つてゆつくり戰をしませう。』

と言ひ遣りました。桃井は、夙に楠公の高義に感銘してゐることとて、菊水の旗印を見ると、さて〳〵惡いところで出逢つたものだと困惑してゐたところへ、この軍使でありましたから、大に喜び、

『仰せの趣畏まりました。敵味方に分れては居りますが、桃井個人としては、貴殿に恩義こそあれ、何の怨みも御座りませぬ。どうぞ御遠慮なく御通り下され。』

と、道を開いて、通しました。楠の薫りに敵將さへも薫化せられた美譚の一つ。

市街戰

比叡山といふ山は、難攻不落の要害であるばかりでなく、京都の東北に居然として聳え、東は琵琶湖より大津を制し、西は京都の死命を制するやうな位置にありますから、京都の防備の上には、最も大切な地點であります。此の山の僧徒が、朝廷に御味方するといふことは、當然のことではあるが、戰略上甚だ好都合のことでありました。新田義貞は正月十日、二萬騎を率ゐて、鑾輿を奉じ、延曆寺に上り、こゝを暫しの皇居と定められました。正成、此時比叡山の東麓、東阪本に其の兵を集結すると共に、電光石火の如き迅速さを以て、豫ねて收藏してあつた兵糧米三千餘石と、大豆二千三百石とを、叡山の官軍全體に公平に分配したので、何の用意もなく茲に集中し、明日からの糧にも困つてゐる大軍は、忽ち蘇生の思ひをなし、士氣大に振

ひました。而して、此外に保藏されてあつた數千石の兵糧は、堅く之を保管して、安に出さず、持久戰に備へたので、官軍はいよ〳〵安心して戰鬪に從事することが出來、皆口々に楠公の用意周到なるに感謝したといふことであります。天皇にも此の事を御聞き遊ばされ、衷心より感歎遊ばされたと申します。山門の僧徒も、官軍の士氣旺盛なるを見て心を安んじ、力を協せて、主上を守護しまゐらせました。

三井寺（園城寺）は、同じく琵琶湖に近い名刹で、ここにも多くの僧兵がありましたが、比叡山とは自ら競爭の形で仲が惡くありました。足利尊氏は夙くこれに着目し、園城寺を懷柔して味方に付けておきましたので、京都に入ると共に、細川定禪を園城寺に遣はし、延曆寺の官兵と對抗せしめました。

さて、鎭守府將軍義良親王を奉ずる北畠顯家父子は、曩に鎌倉攻擊の命を受け、奥羽の大軍を率ゐて出發しましたが、何分土地僻遠のこととて行軍が捗取らず、鎌倉に入つた時には既に尊氏は義貞を破つて、西上したあとであつたので、尊氏の後を追うて上り、正月十四日矢橋に着き、それより湖を渡つて東阪本に着いたのであります。此の新手の援兵を得た官軍は、士氣大に振ひ、直ちに園城寺攻擊の議を決し、十六日義貞、顯家の軍を併せて園城寺を攻めました。これは、未だ奥羽官軍の來着を知らなかつた賊軍にとつては、意表外であつたので、流石猛勇を以て鳴る細川定禪も、官軍の鋭鋒に敵すること能はず、園城寺は忽ちにして兵火の犧牲となり、賊軍算を亂して敗退する後から、新田軍猛烈に追擊して多大の損害を與へ、更に東山一帶に占據し、盛んに篝火を燒いて兵威を示し、一方には楠軍が、比叡山の西阪本に陣取つて、突出の機會を窺ひ、名和長年の軍も亦、西阪本に集中しました。かくして十六日より猛烈なる市街戰が續くこと半箇月、三十日に至つて賊軍つひに大敗し、丹波路に潰走しました。

泣き男

さて、この戰亂の中にあつて、ちと、ほゝゑましい一笑話があります。それは楠公の泣き男といふ話であります。どこまで眞實で、どこまで傳說であるか、はつきりしたことは分りませぬが、昔から言ひ傳へられてをり、且つ如何にも楠公にありさうなことなので、その言ひ傳へのまゝを記しませう。楠公は用兵の天才であつたばかりでなく、政治、經濟、あらゆる方面に卓越した手腕をもつてをられましたから、その人を用ふる方法も、意表に出るものがありました。北條氏亡びて後、しばらく赤坂に居られた時、間杉平次（一に杉本左兵衞ともいふ）といふ男があつて、泣くことに妙を得、その泣くのを聞くと如何な鬼のやうな武士も、貰ひ泣きをせずには居られぬといふことを聞き、

『それは面白い男もあるものだ。呼んで見てくれ。』

と、試みに間杉を呼んで泣かせて見ましたが、成る程、いかにもしめつぽく搔き口說くあはれさに、嘘と知りつつ、つい泣いてしまふほどなので、

『泣くことも茲まで來れば一藝だ。感心々々。召し抱へよう。』

と、莫大の給金を與へて召し抱へたのでありました。軍國多端、入費の多い節、抱へるものもあらうに、

泣き男とは何といふ馬鹿げたことだ、と笑ふ者もあり、近臣でさへ楠公の眞意を測りかねて、首を傾けるのでありました。

去年十二月、東山道軍を督して鎌倉に向はれた大智院宮には、鎌倉の攻撃に間に合はず、北畠顯家よりも遲れて鎌倉に入られ、又顯家の後を追うて、二萬餘騎を率ゐて西上されました。まるで鼬こッこのやうです。此の新手の軍が東坂本に着いたので官軍の勢再び振ひ、二十七日を以て京師の賊に總攻撃を加へることとなりました。楠、結城、名和の諸軍は西坂本に、北畠軍は山科に、洞院實世の新鋭軍は赤山に、叡山の山徒は鹿谷に、新田軍は北白河に陣を取り、二十七日の拂曉から猛烈なる攻撃を加へたので、賊兵大にひるむ所を、北畠顯家の軍、粟田口より尊氏の本營を衝かんとしました。尊氏大に驚き自ら戰線に立つて防戰してゐると、新田義貞逞兵をすぐつて、雲霞の如き敵中に突入し、四角八面に斬り立てた勢ひに、賊兵浮足立つて敗走し、尊氏は僅に身を以て遁れ、丹波路指して走りました。此夜、楠公義貞に向つて策を獻じ、勝ち誇りたる官軍、ことごとく鋒を收めて、京洛より引揚げてしまひました。

楠公の策は、かうであつたのです。

此日の戰鬪に、義貞は死を決して奮戰し、尊氏の首を獲ようとしました。其の勢ひ烈火の如く、數十倍を數へる尊氏の軍をして披靡せしめたのですが、尊氏といふ奴、どこまで運のよい奴か、つひに網をくぐつて逃げ去つたのであります。これは義貞にとつても無念の至りでありましたが、正成に取つても殘念なことでありました。そこで楠公は、わざと洛中の兵を引き揚げ、義貞始め、官軍の諸將が戰死したといふ虛報を傳へ、尊氏が迂濶々々と京都に還つたところを、包んで擊ち取らうといふ策戰なのであります。

翌日例の泣男は、京都の市中に至り、とある寺院のほとりを、さめ〴〵と泣いて、何ものをか探し廻つてゐるので、僧侶たちは、何を泣くのだと聞きますと、

『昨日の合戰で、楠殿、新田殿が討たれ給うたので、その御屍を探して居るのであります。』

と涙を抑へて探し廻つてゐる樣子、如何にも哀れで僞りとは思へぬので、僧侶たちも大に驚き、且つ憐み、共に手を分けて京都中の戰場を探し廻りました。このことが忽ち賊軍に知れましたので、尊氏もうま〳〵と欺かれてしまひました。

『昨日味方があの樣に敗けたにも拘らず、敵が京都を引上げたのを不思議だと思ふたのは、さては新田や楠が陣歿した爲であつたか。それでは屍體を探し出せ。』

と、賊軍も手分けをして、楠、新田の首探しを始めました。しかし、もとより、死なぬ者の首が落ちてゐる筈もないので、どうやら似寄りの首を拾ひ、獄門にかけ、新田左兵衞督義貞、楠河內判官正成と、札をつけておきますと、いたづら好きの京都人——江戸時代の江戸ッ子がいたづら好きであつたと同樣に、昔の京都人はかなり諷刺や、落書を好んだもののやうです——が、その獄門の札に、

『これは似た（新田）首なり、

まさしげ（まことらしく）にも書きたる虛言かな。』

と惡口をかいてゆきました。

さて、其の夜になつて、小原、鞍馬の方に向けて、數千の篝火が見え、次第に遠のいてゆく樣子なので、賊兵は、

『すはこそ、官軍は、大將を討たれて逃げてゆくぞ。一人のこらず討ち取れ。』

と、諸方に兵を分つて、追擊にかかりました。かくして、京都の賊兵が、ほとんど出拂つたのを見はからひ、千種忠顯、名和長年、結城九郎を第一陣とし、北畠顯家を第二陣、洞院實世を第三陣、新田義貞を第四陣、楠正成を第五陣として、二十九日の拂曉に、尊氏の邸を急襲する手筈を定めました。

かくまでに周到に計つて行つた攻擊にもかかはらず、尊氏を又取り逃がしてしまひました。これはどこまでも尊氏の惡運の强かつたのでありませう。しかし一つには先陣千種忠顯の軍が不統制だつたのだともいひます。千種忠顯は、猛勇ではあつたが不良公卿で、大酒ばかり飲んで居り、其の部下も不統制で、兵法を誤り、所在に火を放ち、皷噪して進んだので、早く敵に氣取られたのであります。しかし、不意を討たれた尊氏、直義は、這ふ〳〵の體で京都を脫出し、賊兵は皆戰意を失つて、散り〳〵に逃げ去り、死者七千に及びました。

かくて、三十日夜、主上には再び京都に還幸したまひました。

聖雄の面影

京南八幡城には、正成の一族恩地滿一が一千餘人を率ゐて籠城して居つたのを、賊將武田信武、小笠原孫八等六千餘騎を以て包圍して居りましたので、楠公は和田正遠に三千餘騎を率ゐて救援に赴かせました。武田が、何故此の孤城の攻擊に熱中したのか分りませぬが、其の勢なか〳〵猛烈で、和田の救援軍も之を退けることが出來なかつたので、二月一日、楠公親しく進出して敵を威壓し、敵兵ことごとく降伏しました。同時に名和長年の軍は丹波に入り、尊氏を壓迫したので、賊軍遁れ去るもの多く、尊氏はつひに兵庫に走りました。宇都宮公綱は曩に義貞に屬して淀に在り、義貞の敗退するや尊氏に降り、今、丹波に走りましたが、尊氏の敗勢を見ると、又もや官軍に降り、正成に依つて執成しを願つたので、其の變節を憤る諸將は寧ろ首を刎ねてしまはうといひましたが、正成は公綱を憐れんで其の降を容れ、生命を助けたのであります。

尊氏は湊川に至つて敗兵を集め、其の勢また大に振ひ再び京都に攻上らうとしてゐると、二月五日、北畠顯家、新田義貞、大軍を率ゐて京都を發し、六日巳刻、兩軍豐島河原に會戰しました。此日賊軍は、豐島河原を前にし、險に據り、强弓を揃へて防戰大に努めたので、官軍討たるゝもの算なく、各隊入れ代つて攻擊したが、つひに奏功せず、漸く敗色が濃厚となりました。此時楠の兵が到着したので、官軍再び生色有り義貞、顯家、共に共同戰線を張らうとしましたが、正成は之を拒け、

『此の敵を正面から攻めても勝てるものではありませぬ。暫く私の仕樣を見て下さい。』

と、其のまゝに通り過ぎ、神崎の南の濱に迂廻し、突如として飜る菊水の旗、急調の軍皷と共に、一團の精兵疾風迅雷の如く直義の本陣に殺倒したので、賊軍周章狼狽算を亂して敗走し、他の諸隊も之を見て一齊

に敗退しました。かくて賊軍は湊川に支へ、官軍之を追擊し、十二日再び小清水に會戰しましたが、官軍勢大に振ひ、尊氏、直義辛く命を拾うて、舟に乘り、西國に走りました。此時、楠公は、尊氏一たび西海に走らば、虎を野に放つが如く、西國の賊徒皆蜂起すべきを思ひ、全力を盡して尊氏を獲ることを獻策したのでありましたが、勝に奢りたる義貞其の言を容れず、追擊の緩慢であつたため、再び流星光底に長蛇を逸したのは、殘念の至りでありました。此役を通じ、楠公の獻策、常に容れられず、しかも其の豫言一々適中し、最後の土壇場となつて、必らず楠公の助けを仰がなくてはならなかつたのであります。

道德は孔孟の如く、武略は諸葛孔明の如く、不世出の大才を懷き乍ら、閥族萬能の社會に生れ、位卑きが爲に其の策行はれず、しかも天を怨まず、人を咎めず、最善を盡して自己の職分を全うしたる楠公の如きは、まことに聖雄といふべきであります。

偉人の最期

獅子、狐を取る

官軍大捷、尊氏兄弟西國に敗走したといふ報道は、京都を湧き返らせました、總帥新田義貞は功によつて左近衛中將に任ぜられ、脇屋義助は右衛門佐に任ぜられました。公卿たちは、永久の平和が、都に來たものやうに喜びました。東山、西山の櫻は、爛漫として咲き誇つてをります。人々は、そのかげに盃を擧げて、樂しい春を謳ひました。世を擧げて、喜び樂しんでゐる中にあつて、ひとり楠公のみは、憂心沖々として國を思ひ、夜も眠を成さぬことが多くありました。

果して西國には、尊氏を擁して賊徒蜂起し、官軍至るところに敗衂するとの報道が達しました。四國の賊兵も次第に勢を挽回して居ります。朝廷では、再び賊徒討伐の會議が開かれ、諸將帥參內して、御下問に奉答しました。義貞のいふには

『西國の朝敵を追討することは、いと易いことであります。諸國に官軍が多く又、尊氏は戰術が拙くありますから、大したこともありませぬ。近い中に追伐に參りませう。』

と、こともなげに答へました。北畠顯家は

『東國には別に朝敵も居りませぬから、只今のところ心配もありますまい。新田殿の戰爭御難儀でありまし

たら、私が東國の大兵を率ゐて、御手傳に參りませう。』

といひました。この顯家は從一位前大納言親房の子で家柄がよい爲に、左近衛中將陸奥守を拜し、まだ二十歳を出たばかりの青年でありながら、鎭守府將軍を奉じて奥州に勢威を張つてゐた男です。年少客氣で、しかも家柄を誇る貴公子の目には、成上り者の義貞の羽ぶりのよいのが、ちと癪にさはる氣持もあつて、どうかすると義貞と衝突したがるのでありました。助けてやりたくはないが、困つたら助けてやるぞといふやうな口吻です。これも不完全なチームワークの證です。

宰相坊門清忠は、

『それがよからう、そして正成、忠顯、長年は、京都の守護に當られるがよからう。』

正成は、それまでだまつて、人々のいふことを聞いてゐましたが、やがて膝を進め、

『つく〴〵思ひますに、獅子は狐を取るにも、虎を取る勢を以てすると申します。春の戰ひに、尊氏の戰術が拙かつたとて、今後も拙いであらうと輕侮なさるのは、よろしくないと存じます。又、東國に朝敵のありませぬ以上は、顯家卿にも御歸任になる必要はございますまい。只今御歸任になりますれば、味方の軍勢二萬人の減少となり、再び御上落になるといつても、容易なことではございませぬ。此際御歸任をお延ばしになつて、新田殿が大手の大將ならば、北畠殿搦手の大將として御西下なさるがよろしいと存じます。又、京都には、千種殿、名和殿、等がおいで遊ばす上は、心配のこともありませぬから、私は不肖ながら、新田殿のお伴をして參ります。さうして一擧にして朝敵を平らげることに致したう御座います。』

と述べました。けれども、坊門清忠は、何と思ふたのか、此議を採用しませんでした。一體清忠といふ人は、自信が強く、人言を容れることの出來なかつた人で、殊に軍事上何の知識もない素人である清忠が、軍事に嘴を容れたことが、失敗の基でありました。今日の言葉でいへば、統帥權の干犯といふことであります。清忠が、嘴を容れなかつたところで、當時の狀態では、楠公の意見がそのまゝ行はれたかどうかは危ぶまれますが、彼がもう少し研究的態度を以て武人の專門的な意見に傾聽したならば、よかつたらうにと惜しまれます。

最後の手段

正成の目には、天下の形勢は歷々として掌を指すが如く明かでありました。それは、義貞の考へてゐるやうな簡單なものではなかつたのです。義貞は尊氏を當面の敵としてゐましたから、色眼鏡もあり、誤算もありました。公平な、第三者の立場から、明鏡止水の如き心を以て觀察してゐる楠公には、兩者の優劣が正しく分りました。義貞は良將ではあるが、人を用ふること尊氏に及ばず、しかも敵を侮つてゐる點に於て既に敗兆がある。尊氏は一旦破れて、必死の勢ひである上に、天下の武士の信望を得てゐる。それに恐らく楠公も既に氣付かれたであらうことは、尊氏が持明院統に縋つて、僞朝擁立を企てるであらうといふことです今までこそ、朝敵となることを厭うて日和見をしてゐる兩股武士が、もしも尊氏の希望する如く、僞朝擁立に成功したならば、その旗幟に欺かるゝに違ひない。左すれば義貞の方にはいよ〳〵勝味がない。先んずれ

ば人を制すで、此際急速に敵を殲滅せしむるが最良であるが、その策が行はれないとしたならば、どうしたらよからう

最後の手段！

新田、足利を和睦せしめるより外に仕方がない。

左樣だ、私心を捨てゝ天下の爲に和睦して貰はう。

翌る朝早く楠公の姿は、北畠邸にあらはれました。僅の供人をつれたのみで、早朝から微行して來た楠の姿を見ると、顯家は何ごとかと怪しんで、招き入れました。正成は、人拂ひを乞うた上でいふやうは、

『新田殿西國へ出向と御決定になりましたが、ここ二十日以内に御下向になりますれば、敵の城郭が未だ調はず、勝利を得られると存じますが、敵を侮つてをられますからどうも二十日や三十日の中には御出になるまいと存じます。さうなりますと、手遲れに相成ります。もしもそこへ、尊氏が大兵を率ゐて攻めて參りましたら、味方の負となりまして、又々山門に行幸といふやうなことになりませうが、その時はどうか先達のやうに、早速大軍を率ゐて御來援下さいませ。私は骸を都に晒す決心で御座います。』

名將の切々たる一語々々を聞いて、年少血氣の大將も思はず涙を催し、しんみりとして聞き入りました。正成は尙も言葉をつぎ、

『ついては、私に最後の祕策が御座いますゆゑ、御聽に入れたく存じます。』

『ほうその祕策とは？』

『つら〳〵天下の形勢を見まするに、人心朝廷を離れて居りますから、新田殿いかに良將といへども、勝を得られることといかがかと存じます。此際先づ尊氏と和睦なされては如何で御座いませうか。一と先づ尊氏の罪を許し、所領を安堵なされ、功に依つて恩賞あるべしと勅諚なされ、又、尊氏、義貞兩人同族の間であれば、爭ひを止めよと勅諚なされば、兩人ともよもや否とは申しますまい。その御使は楠が仕ります。新田が若し、勅諚に背きますれば、私が斬つて捨てます。尊氏が勅諚に背きますれば、如何樣にも欺き寄せて刺し殺します。それより外には世の中の靜まる方法は御座いませぬ。尊氏は此春の敗戰で懲りて居ります故私が御使として參りましたならば決して背きは致しますまい。どうか此のことを御奏上下さいませ。此の方法を御用ゐなければ、天下は尊氏のものとなるで御座いませう。私は何時までも、生きて苦勞をしたくありませぬから、一番に討死をいたします。此後、このやうな機會もないことと存じますから、思ふことをありたけ申上げるのであります。』

顯家の頰には、涙がはらはらと流れました。若い大將は、感激性に於ても人一倍であります。

『あなたのやうな忠臣が、どこにありませう。先日、山門で先陣を爭ひ、義貞と喧嘩をしました、私の小さな精神を省みて、恥ぢ入る計りです。仰のことは、ひそかに上奏いたしませう。けれども、尊氏はなか〳〵上京いたしますまい。一旦朝敵となつた上は、迚も御許しがあるとは思ひますまいから、そのことは六ケしいでありませう。』

『いや、そのことも考へてをります。萬一、尊氏が疑ひをはさむやうでありましたら、長子正行を、尊氏に渡します。長子を人質といたしましたら、尊氏もまさか疑ひはいたしますまい。君の御用に立つことでございましたら、子を捨てることも厭ひませぬ。』

これをきいた顯家は、止め度もなく流れる涙を拭ひながら、

『君の爲に一命を捨てるといふことは、あたりまへのことでありますが、子を捨てようといふことは聞いたことがありませぬ。畏れ入つた御心であります。早速、このことを奏上いたしませう。』

と約束して別れました。

其後、顯家參内して、このことを委細上奏しました。天皇には、いたく正成の忠志を御喜びになりましたけれども、天子、朝敵に對して和をなせしこと、未だ其の例なしといふ理由で御裁可になりませんでした。

果して、事態は、楠公の想像通りに進展しました。新田義貞は、官軍の總帥として四國に向ひ、赤松圓心と戰ひましたが、赤松の軍驍勇にして善戰し、脇屋義助は三石城に、大井田氏經は福山城に、共に敵を圍んで、成功せぬ中に、尊氏は九州の大兵を率ゐて長門に入り、五月一日嚴島に着した時、曩に光嚴院に請うて置いた院宣を得て、公然錦旗を飜し、五月十日水路鞆津を發し、弟直義は陸兵を率ゐ、水陸呼應して雲霞の如き大勢を以て東上したのであります。かくして新田氏の率ゐる官軍は、至るところに敗退し、兵庫を指して總退却をなすの外なきに至りました。

少年正行

正行は正中二年に水分の屋敷で生れました。其頃、父正成は、紀州の安田庄司や、攝津の渡邊を征服して威勢を近隣に振つて居りました。其後楠氏の勢威ますます盛んで、近國其の政治を樂しんでをりましたから正行の幼時は、わりあひに平和に過ぎたのですが、元弘の役以後、正行はたえざる擾亂と不安の中に育ちました。赤坂城の旗擧げのあつたのは、滿七歳の時であります、正行は母と共に難を觀心寺に避け、僧徒の中に生活してゐました。いろ〳〵な危難と、父のない寂しさの中にまる二年を送つて、再び赤坂に歸つた時はどんなに嬉しかつたことでせう。

其後、父正成が京都に邸をもち、そこに居ることが多くなつたので、正行もたび〳〵京都へ上りました。時には母と共に、時には家臣に守られて、赤坂から、京都への道を、彼はたび〳〵往復しました。京都の生活は、あはただしく、落着かぬものでありましたが、政務に忙しい父の顏を、時たま見ることが樂しみでありました。さうして、老臣たちから、文武の道を學びつゝ、いつしか十一歳になりました。

『尊氏がまた遣つて來る。』

といふ噂は、毎日、幼い正行の耳を撲ちました。母は、既に赤坂に送り還されました。正行は、

『尊氏がやつて來たら斬つてやらう。』

と、小さい刀をふりまはして、その日の來るのを待つてゐました。

義貞兵庫に還つて軍狀を奏上しましたので、御前會議が開かれ、軍略が議せられた結果、正成に命じ、兵庫に下りて義貞と力を協すべしとのことでありました。正成は、其の戰術眼から、義貞敗戰の理由を說き、兵庫に據つて敵を防がうとするも、敵は水陸竝び進んで來るのであるから、たとへ陸上では敵を遮り得ても海上の敵は、思ふまゝの所から上陸して、味方は挾擊せらるゝに定つてゐる。それよりも寧ろ義貞を京都に呼び戻し、主上を山門に行幸なし參らせ、敵を京都に引き入るるがよい。自分は領地に還り、攝河泉の兵を以て敵の背後を脅かし、且つ西國との通路を遮斷して敵の糧道を斷つであらう。さすれば敵の士氣は沮喪するから其の機に乘じて敵を殲滅するがよい。と主張しました。然るに例の坊門清忠は、又しても正成の意見を拒け、

『節度使一回も賊と戰はずして還るは朝廷の威令にかかはる。又、一年に二度も山門に行幸なさるといふことも、朝廷の威を輕くするものである。』

といひましたので、正成も今はこれまでなりと、決心し、御前を退出しました。朱舜水がいはゆる『庸臣斷を專らにする』もの、實に清忠であります。中興の失敗、其の原因は數多くあつたが、清忠の罪最も大なりとは何人も一致する考へでありませう。

櫻井驛頭の血涙

時は延元元年五月二十二日でありました。若葉かゞやく三十六峰を後にして、楠氏の一黨三千八百餘騎、隊伍蕭々として京都の町を出ました。『非理法權天』の文字をしるした菊水の旗、例によつて淸らかなれども將士の面上には、凄壯の氣がみなぎつてをりました。

一行が、攝津國櫻井驛頭（東海道線山崎驛より西南七町ほどの處、線路の南側に其の遺跡あり）に達した時、突然行軍が中止せられました。路傍の松樹の蔭に座を設け、京都より伴ひ來つた子正行と、弟正季、老臣一同を招き寄せた正成は、まづ正行に向つて、重たい口を開きました。

『獅子は子を生んで三日を經る時、數十丈の石壁より之を擲げる。其子、まことに獅子の氣分あれば、敎へざるに跳ね返つて、死なぬといふことである。ましてや、汝、年すでに十歲にあまつて居る。一言、耳に止まらばわが敎へに背くこと勿れ。今度の合戰は、天下の安否の分るゝ處、此世に於て汝の顏を見ること、これを限りと思ふ、正成討死すると聞いたならば、天下は尊氏のものとなつたと心得よ。されども、一旦の命を助からん爲に、多年の忠烈を失ひて敵に降り、父の名を汚す勿れ。一族郎黨、一人でも生き殘つてあらん限りは、金剛山に引籠つて敵を引受け戰へ。これは曾て、帝より賜はつた寶刀である。これを汝に授けるゆゑ、父戀しと思ふならば之を見て忠節を磨け。和田、恩地、八尾等の老臣を、師とも父とも思ひ、何ごとも其の敎を受けよ。』

これをきいた正行、賢いとはいつても、まだ十一歲の少年ですから、頭を振つて、

『父上が討死なさるのに、私が生き殘つてゐることはいやで御座います。私も父上と共に討死いたします。』

と泣き出しました。正成は涙を抑へ、

『聞きわけのないことをいふではない。汝を河内へかへすのは、汝を可哀さうに思ふからではない。生きのこつて立派な武士になり、朝敵を滅ぼし、君に忠義を盡させたいからである。そのやうに聞きわけのないことでは所詮行く末立派なものにはなれまい。早々、河内へ還るがよいぞ。』

と叱られて、泣きじやくりながらも、立上る正行を見て幾戰場を往來した老武者たちも、ひとしく鎧の袖をしぼりました。

正成はさらに、諸老臣にむかひ、つぶさに天下の形勢を語り、將來の豫言をなしたる後、

『今回の戰、所詮勝利は覺束ない、元弘以來、全力を盡して皇家の爲に奮鬪したが、天下の事、志に任せず、戰うては必ず勝つてゐるが、未だ皇基を磐石の安きに置くことが出來ぬのは、甚だ遺憾であるが、自分の力の及ばぬところである。笠置の行宮に聖勅を拜した際、誓ひ奉つた言葉もあれば、今は自ら決したいと思ふ。自分は正季と共に七百騎を率ゐて兵庫に赴く故、各々方は三千騎を率ゐて河内に還り、正行を守り立て徐ろに後圖を計つて貰ひたい。必ずや早まりて事を過つことなく、十分に民力を涵養して時機の來るを待つがよい。尊氏兵權を握るとも、其の部下は我慾の爲に集まつた虎狼の輩であるから、必ず一致を缺き、爭を生ずるに至るであらう。其時を待つことが肝要である。』

と告げました。意外の宣言を聞いた諸老臣はもとより士卒らも、大に驚き、

『多年御厚恩を受けてゐる我等、主公の御決心を知り乍ら見すゝ〳〵御別れして國に歸ることが出來ませうか死なば諸共、どこまでも御伴致します。』

と固く執つて聞かぬので、正成聲を勵まし、

『此の年頃、諸君と苦樂を共にし、節を磨いたのはひとへに君國の爲である。今、予は君國の爲に死するが諸君に生き殘つて貰はうといふのも亦、君國の爲である。私情に於ては別るゝに忍びぬが、どうか私情を捨てて、大義に從ひ、報效萬全を期して貰ひたい。』

と情理を盡して諭したので、諸將も言ひ返すすべなく、涙を拭うて其の命に從ひました。

和田正遠、恩地左近、八尾顯幸、湯淺孫六等の諸老將多年楠公の訓練を受けた勇士三千騎を率ゐて、南に向へば、楠公は選りに選つた精兵七百騎を率ゐて西に向ふ。三軍肅々として聲を呑み、櫻井驛頭心なき草木も、涙せんばかりであります。

山雨まさに至らんとす

五月二十四日の夕、尊氏の兵船海を蔽うて來り、播磨國大藏谷沖より、淡路の瀨戸、須磨、明石に至るまで、船ならぬところなく、陸路、直義の大軍も亦、鹽谷より大藏谷に亙り、露營を布いて、明日の軍議に餘念のない時、僅か七百騎の小部隊を率ゐて、楠公が、義貞の陣にあらはれたことは、人々をして怪訝の目をみはらせました。義貞は急いで、正成を陣營に招じ入れ、今日の防戰についての朝廷の命令と、正成の意見とを訊ねました。正成は自分の考へた一般戰略と、それが朝廷に容れられなかつた次第を詳しく語ると、義

貞一々首肯いて、

『あなたの御考へには私も一々同感であります。しかしながら、曩には鎌倉を攻めようとして失敗し、今また四國の小城二つ三つを落し得ずして退却し、今、敵を目の前において退くことは、世間の非難も甚だしからうと思ひますので、勝敗を度外に置いて、極力奮戰しようと思ふのです。』

と告げました。

『それにしても、あなたの部隊は大へん御手薄に見受けますが、あなたは討死を御覺悟なさつてゐるのではありませんか。』

『いや、勿論、私はいつでも死を覺悟してゐます。』

と正成はからく〳〵と笑ひました。

『手勢の少ないのは、あちこちの持城に兵を分けた爲です。相手は數十萬の大軍ですから、七百騎であらうと七千騎であらうと五十歩百歩です。』

『いかさま、左樣ではありますが……しかし、主上にはあなたを深く賴み思召さるゝ事でありますから、どうか生命を重んじ、身を愼んで、報效を全うさるるやうおねがひ致します。私とても、何時死なぬとは限りませんが。』

と、義貞も、しんみりしていひました。

それから、明日の軍略に移り、正成は會下山の高地に據つて直義を防ぎ、義貞は兵庫にあつて、尊氏に當ることになりました。

翌くれば二十五日、足利直義は、其の兵を三分し、一隊は直義自ら之を率ゐ、高、大友、赤松の諸將之に屬し、播磨、美作、備前の軍を以て會下山に向ひます。山手軍は斯波高經之を率ゐ、周防、長門の兵を以て組織し、會下山の北方を迂廻しようとする。別に濱手隊は少貳賴尙之を率ゐ、筑前、豐前、肥前、肥後、薩摩の兵を以て海岸に沿ひ湊川に向ふ。一方海上には、細川の船隊五百餘艘先づ錨を拔いて發し、尊氏の本隊が數千艘之に續き、海陸呼應して進みます。之に對する官軍は義貞、其の本營を和田岬に置きて全軍を指揮し、脇屋義助、大館氏明、各々支隊を率ゐて、經島、燈爐堂に位置し、敵を邀擊せんとして居ます。正成は會下山の高地から、直義の軍の進出を討つて痛擊を與へんとしてをり、正季は會下山北の隘路を扼して、山手隊を待つてゐます。かうして戰機は刻々に迫りました。

義貞は敵の優勢に驚き、正成に向ひ

『此の形勢では、あなたとの連絡が絕たれるかも知れません。御手勢があまりに少く、危險に思はれますから、千葉、菊池、宇都宮の諸部隊をそちらへ差上げませう。』

といひましたが、もとより死を決してゐる正成のことゆゑ、

『いや〳〵、それには及びませぬ。』

と謝絕しました。しかし、菊池武重は、どうしても正成のことが氣にかかつてならぬので、馬を飛ばして陣

中に來り、

『御手勢があまり薄くて、いかがと存じます。私に御手傳ひをさせて下さい。私の兵でも、御手勢よりは多いと思ひます。』

と申入れました。元弘以來、豹變常なき九州武士の中に、終始一貫、皇家のために盡してゐる、菊池一黨の好意には、正成もほろりとしました。

『御厚意まことにありがたう。敵は大軍でありますが、烏合の衆でありますから、なに大したことはありますまい。それよりも濱手の戰鬪こそ心がかりであります。どうか、新田殿に力を協せて御戰ひ下さい。』

と、雲霞の如き敵軍を睥睨して、眉一つ動かさぬのでありました。武重も強ひてといふわけにもゆかず、憂色を顏に浮べて、別れを告げました。

流星光底長蛇を逸す

かくて、日本國の歷史の存する限り、永遠に記憶せられねばならぬ、いはゆる湊川合戰は、二十五日の午前十時、會下山下の一角に開かれました。直義軍の先鋒、赤松則祐の一隊、進んで山下に迫つた時、楠軍の一部隊志貴某、敵を近々と引寄せて置き、油斷を見すまして、一團の鐵騎、さながら天から降つたもののやうに敵の中央に突入し、縱橫無盡に突きまくつたので、赤松の兵は雪崩をうつて退きました。ほとんど同時に、會下山下の隘路に迫つた賊の山手軍は、正季の支隊のために猛擊を受け、多大の損害を蒙つて敗退します。それまで滿を持して放たず、ひつそりと鳴りを靜めてゐた正成の本隊は、此の時直義の本隊に向ひ、猛然として突入しました。楠公麾下の精兵七百人、ことごとく死を決して居ることですから、其の勢ひ、猛虎の群羊を驅るが如く、數萬の賊兵、ことごとく披靡し、どつと雪崩をうつて敗退する。直義、聲を嗄らして號令すれど命を奉ずるものなく、逡巡してゐる中に、忽ち馬を射られ、走ることが出來ず、あせつてゐるところを、官軍間近く追ひ至り、

『あれこそ賊將だ、それ討ち取れ。』

と、鋒を連ねて殺倒しました。此時賊兵藥師寺十郎次郎、馬を驅つて走せ來り、此の樣子を見ると、ヒラリ馬から飛び降り、

『さあ、この馬でお逃げなさいませ。』

といふなり、大刀を拔いて、迫り來る官軍の馬の足を拂ひ立てたのは機智でありました。

惡運の强い直義、かうして危き命を拾ひました。

濱手の方は如何にと見ると、新田軍に取つて、この長い海岸線を防禦することは全く不可能でありました細川の船隊が岸に間近く迫つて來るので、之を擊攘しようと其の後を追躡してゐる中に、尊氏の本隊は早くも、和田岬に上陸し、直ちに義貞の前面に迫つたと思ふと、細川軍は、更に義貞軍の背後に廻つて神戸、西宮より續々として上陸しましたから、義貞は腹背に敵を受けるに至り、徐々に其の本隊を東北に移動せねば

ならぬことになつて、楠軍との連絡はこゝに絶たれるに至りました。此時直義危しと見た尊氏は大に驚き

『直義を討たすな。それ救へ。』

と、高師直、吉良滿良等に命じて、正成の背後を襲はせました。楠軍は、茲に鋒を轉じて尊氏の軍に迫り奮激突戰一以て百に當り、戰ふこと六時間、午後四時に至つて、殘すもの僅に七十餘人、正成自ら身に十一創を負うたので、今はこれまでと殘兵を收めて、湊川に近い路傍の小庵に入りました。

賊將、聖雄を惜む

純忠至誠の楠公が、最後の血戰を見るもの、誰がその悲壯な決意に動かされぬものがありませう。細川相模守清氏は、足利の一族でありましたが、之より曩、楠公の陣に使を遣はし、

『新田は既に敗退し、御後には味方もありませぬのに、何を便りに陣を退かれぬのでありますか。どうか早く御引取り下さい。』

と勸めました。賊將なりとはいへ、この純忠至誠の人を失ふことを惜しむの餘りに出でたのでありませうけれども楠公は、

『御厚意はありがたくありますが、正成は最後の一人となるまで戰ふ決心で御座います。』

と答へて使を返しました。正成、殘兵を率ゐて、小庵に入り、最後の準備をしてゐると、あはたゞしく扉を叩くものがあります。扉を開いて見ると、それは尊氏の軍使須賀壹岐守でありました。

『主人尊氏よりの口上であります。楠殿の、毎々小勢を以て大勢を打靡けらるゝ御働き、前代にも聞かず末代にも類のないことと存じます。尊氏、今は敵味方と別れてをりますが、もとは朋友の交り淺からず、情なく討ち參らする心はありませぬ。このまゝ味方の勢を引取りまする故、どうか河内に御歸り下され、他日あらためて一戰することになさいませ。』

と述べました。正成莞爾と微笑み、

『足利殿の御芳志、まことに難有い。さりながら、正成、今日は一死君恩に報ずる覺悟であります。たゞ少年を一人、鄕里に還し遣はしたく思ひますから、無事に歸れるやうにして下さい』

と告げました。此の返事を聞いて、尊氏以下、さてはと今日を一期として討死の決心であつたか、さてこそ目を驚かすばかりの働きであつたと、敵ながらも憮然として涙を呑みました。

正成は、竹童丸といふ少年を呼び、

『お前は、御苦勞だが、これから河内へ歸り、正行に父の遺物を屆け尙遺言を傳へてくれい。』

といひました。少年ながらも、この最後まで行動を共にしたほどの竹童丸ですから、この意外の命令に驚き、

『殿を始め、皆樣が御自害なされるのに、私一人が生き殘ることは出來ませぬ。あまり情ない御仰でございます。』

と、泣いて訴へました。

『いかさま、さう思ふのは無理はない。しかしお前は大した傷もしてゐないが、外のものは皆重傷を負うて居る。お前が家に歸らなければ、今日の戰況を傳へる人がない。それにお前はまだ年も若いし、死ぬべき年ではない。末永く生き長らへて、正行のために忠義を盡して貰はねばならぬ。死ぬばかりが忠義ではないぞ分つたか。』

と、懇々と諭されて、賢い竹童丸

『よく分りました。では御使を致します。』

と答へました。正成は、着てゐた鎧を脱ぎ、それを竹童丸に渡し、最後の遺訓を認めた手紙を託して、竹童丸を家に還しました。

噫巨星つひに墮つ

夕日は既に、かなたの山かげに入らうとして、名殘りの光、まばゆく今日の戰場を照らして居ます。今はこれまでと、六間の客殿を打拔き、二行に竝んだ七十餘人、覺悟のありさま潔く、靜に念佛すること十返正成、正季に向ひ、

『最後の一念はどうぢや。』

『七たび人間と生れて、朝敵を亡ぼします。』

『おゝ、よく言うた。罪深いことではあるが、予もさう思ふ。では、同じく生をかへて、此の本懷を達しようぞ。』

と、莞爾と打笑ひ、靜に白刃を執り、刺し違へて死にました。

之を見て、七十餘人の勇士、皆思ひ〳〵に腹かき切つて死にました。

菊池武重の弟、七郎武朝は、兄の命を受け、楠軍の戰況を見るために來て居ましたが、此の壯烈なる最後の光景を見ると、

『これを見捨てて、おめ〳〵と歸れるものか。』

と、自分も亦、一同の後を追うて自刃しました。

和田正遠の次男正隆、橋本八郎正員の二人は、正成の命に依り最後まで生き殘り、正成、正季の首を斬つて敵將高尾張守を招き、之を渡しました。尊氏は、恭しく二人の首を受取り、はら〳〵と涙を流し、

『生きてもう一度面會したいものであつたに、あたら名將を失うたわい。』

と痛嘆しました。狡獪きはまる直義さへ、

『まことに古今に稀なる名將を失つたこと、殘念でございます。』

と、しばし暗涙に咽んだといふことであります。ややあつて尊氏は、和田、橋本の兩人にむかひ、

『御兩君は、命を全うして御歸國なさい。』

と勸めましたが、兩人は、

『飛んでもないことで御座います。』

と、すぐもとの庵に入り、家に火を放ち、其中で自刄して死にました。

絶世の大忠臣、千古の偉人、楠正成は、かうして死にました。時に年四十三歳。弟正季三十三歳でありました。

天地落寞

正成戰死の報京都に達した時、天皇の御悲しみはいかばかりであつたでせう。まことに、中興の大黒柱は倒れたのです。宰相清忠以下、楠公の志を妨ぐるにこれ力めた大臣たちも、ひとり功を成すに急であつた元帥義貞も、今こそはしみじみと天地の落莫たるものあるを感じたのでありました。「太平記」に

『抑元弘より以來、忝くも此君に憑まれ進らせて、忠を致し、功にほこる者、幾千萬ぞや。然れ共、此亂又出來て後、仁を知らぬ者は、朝恩を捨てて敵に屬し、勇なき者は、苟くも免れんとて刑戮にあひ、智なき者は、時の變を辨ぜずして、道に違ふ事のみ有りしに、智仁勇の三德を兼ねて、死を善道に守るは古より今に至る迄、正成程の者は未だ無かりつるに、兄弟共に自害しけるこそ、聖主再び國を失ひて、逆臣邪しまに國威を振ふべき、其の前表の驗なれ。』

と云つて宜しいのであります。されば足利系の文書である「梅松論」の著者さへも

『最後の振舞符合しければ、誠に賢才武略の士とはかやうの者をや申すべきとて、敵も御方も惜しまぬ人ぞなかりけり。』

と激賞したのでありました。

後、天皇には正成の功を追賞して、正三位左近衛中將を贈り給ひました。

義貞は、敗退して都に走り、天皇は、再び山門に臨幸し給ひ、京都は又もや戰亂の巷となりました。尊氏義貞を追うて都に入り、持明院統を擁立し、天皇を欺き迎へて之を幽し、百官公卿を禁殺し、これより大に虎狼の慾を逞うして、日本の國史を汚したのであります。しかしながら楠公が誠忠の大精神は、其の子孫よく之を傳へて、壯烈前古に比なき吉野朝五十餘年の歴史に、國體の精華を發揮したのみならず、其の遺芳日本帝國と共に長く存し、機に觸れ、事に臨んで、殉國の精神を國民の胸裡に煥發して居るのであります。

それはさて置き、尊氏は、都に入ると共に、型の如く正成の首を六條河原に梟しました。今度は前回の僞首と異り、全く本物であることが分りましたので、京都の市民、皆深く忠臣の死を悲しみあひました。六日の後、尊氏、世瀨川入道祐憐を使とし、正成の首を奉じて河内に至り、遺族に贈らせました。これも、尊氏が、正成の人格を崇慕するの餘りに出でたことであります。この時、尊氏は、祐憐をして、鄭重なる弔詞を述べさせ、尚今後楠氏から攻擊さるゝことさへなければ、攝、河、泉三國には決して兵を向けぬと告げさせました。

かはりはてたる主公の貌を仰ぎ見た、遺族、諸將の心はいかばかりであつたらうか、今更ながら、ありし

日の高恩を思ひ、悲歎に暮るゝの外はありませんでした。此の時正行が、歎きのあまり自殺を企て、母の教訓により心を飜へしたことは、名高い話であります。さてあるべきでもないので、人々、涙を押し拭ひ、菩提寺觀心寺で、葬儀のことを營み、境内の一角、本堂の左方丘上にこれを葬りました。今日、楠公の首塚とよばるゝものがそれであります。

楠公の歿後、諸老臣は、よく正行を輔佐して、領内の政治に努め、吉野朝廷の成立後は、其の最大の力となつて忠勤を勵みました。かの、八尾別當顯幸の如きは、そのかみ、楠家と絶えず領地を爭ひ、正成のためにしたたかな目に遇うた間柄であるにも拘らず、長く楠家の藩屏となり、足利尊氏がいくたびか好餌を與へて之を誘惑しようと試みてもつひに應ぜざりし如きは、如何に偉人の遺德が大いなりしかを知るに足るでありませう。

嗚呼忠臣楠子之墓

星霜三百六十餘年、楠公忠死の遺跡は、訪ふ人も稀に、湊川の畔、荒草いたづらに生ひ、いたづらに枯れて、墓碣の所在さへ明かでないほどであつたのを、つぶさに訪ね求めて、其の遺烈を顯彰したのは、德川光圀でありました。今、湊川神社境内に在るものがそれで、表面の八大字

嗚呼忠臣楠子之墓

は、光圀の筆に成るもの、其の雄渾なる筆致は、まことに此の絶世の大忠臣をあらはすに十分であります。

碑銘は光圀の師事したる、明の遺臣朱舜水の文、之を和譯すれば、

忠孝は天下に著れ、日月は天地に麗く。天地日月無ければ則ち晦蒙否塞す。人心忠孝を廢すれば、亂賊相尋ぎ、乾坤反覆す。余聞く、楠公、諱は正成といふ者、忠勇節烈、國士無雙なり。其の行事を蒐むるに概見すべからず。大抵公の兵を用ふる、强弱の勢を幾先に審にし、成敗の機を呼吸に決す。人を知つて善く任じ、士を體して誠を推す。是を以て謀中らざるなく、而して戰つて刻たざるなし。心を天地に誓ひ、金石渝らず。利の爲に回ならず、害の爲に怖れず。故に能く王室を興復し、舊都に還す。諺に云ふ、前門狼を拒いで、後門虎を進むと。廟謨臧からず、元兇踵を接す。國儲を搆殺し、鐘鐘を傾移す。功成るに垂んとして、主に震ひ、策善しと雖も、庸ひられず。古より未だ元帥前に妬み、庸臣斷を專らにし、而して大將能く功を外に立つる者は有らず。之を牽ふるに、身を以て國に許し、死に之くこと他なし。其の終に臨みて子に訓ふるを觀るに、從容として義に就き、孤を託し命を寄せ、言私に及ばず。精忠日を貫くに非るよりは、能くかくの如く整うて暇あらんや。父子兄弟世々忠貞に篤く、節孝一門に萃まる。盛なる哉、今に至るまで、王公大人より以て里巷の士に及ぶまで、口を交へて之を誦說して衰へず。其れ必ず大に人に過ぐる者有らん。惜しいかな筆を載する者、考信する所無く、其の盛美大德を發揚すること能はざるのみ。

右故河攝泉三州守贈正三位近衛中將楠公の贊、明の徵士舜水之瑜、字魯璵の撰する所、勒して碑文に代

へ以て不朽に垂る。

徳川光圀卿は又、其の編纂せる「大日本史」に於て、大に楠公の忠烈を謳歌し、覇道全盛の日本のまつただ中に、勤王の精神を鼓吹せられましたから、之より楠公の誠忠を慕ふもの益々多く、文人、學者、苟くも筆を執る者、楠公を歌はざるを恥とするほどであつた中に、特に頼山陽の「日本外史」が、楠公の精神を天下に鼓吹したることは最も大なるものでありました、かくして幕末、未曾有の國難に際し、此の精神に涵養せられたる日本國民の協力一致の努力は、つひに王政維新の大業となつて現れたのであります。楠公、湊川に歿せりといへども、その精神は永久に日本人の心を支配し、無數の楠公を生むに及んで、『七生報國』の言葉は、決して僞でなかつたことを知るに足るものであります。

明治二年、兵庫縣令伊藤博文、聖旨を奉じて、湊川碑畔に神社建設のことを定め、五年五月を以て建築に着手し、翌年九月落成を見、別格官幣社湊川神社と呼びました。草創の際、庶政繁多を極めた中に在つて、先づ第一に湊川神社を建設した新政府の趣意は、王政維新の大業が、ひとへに楠公忠烈の薫化であることを示すにあつたと想像されます。

明治十三年、明治天皇には、深く楠公の遺烈を追賞あらせられ、勅して正一位を贈り給ひました。まことに人臣、至上の榮譽であります。

神戸驛のホームを降りて、僅に數百歩を歩めば、われわれは、早くも湊川神社の鳥居の下に立つことが出來ます。その鳥居を潜つて、すぐ右側の木立に圍まれた一廓に立つのが、光圀卿の建てられた墓碑であります。繁華な市街の中とて、境内の狹いのは致し方もないが、清楚なる神殿の前に立つて拜禮をしてゆく人々誰一人として、心からなる敬虔、感謝の面持をうかべて居らぬもののないのは、明治神宮と、靖國神社と乃木神社以外においては、恐らくあまりに見られない光景でありませう。まことにこのところ、是れ、天地正大の氣結晶せるところであります。

昭和十年五月五日印刷
昭和十年五月八日發行

定價壹圓貳拾錢

著者　蘆谷重常

東京市神田區駿河臺三丁目六番地
發行者　關根喜太郎

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者　白井赫太郎

新楠公記

刀江書院
版權所有

發行所　東京市神田區駿河臺三丁目六番地
刀江書院
電話神田(三一八九)(三二七一)
振替東京七三一一八

■霜田靜志譯編■■■■■

問題の教師

霜田靜志著■■■■

子供への理解

多くの人々は、子供を教育するといふ事は單に學問を授ける事だと考へて居る。人間教育といふやうな事も云はれるけれども、實際を見ると依然として智育萬能である。而もその智育も學科の點數をよくし、試驗にうまく行くやうにとの事丈けで、眞の意味での智能の發展を根本的に考へて爲されてゐるのではない。著者はさうした態度とは全く別な子供のために根本的に考へ直した、本當の教育をしたいと希つて來た。さうした考への下にたどり來つた業績を正直に記したものが本書なのである。而も空理空論でなしに、永年の教育體驗を通じて語つてゐるのである。此の意味に於て、本書に擧げた幾多の實例や、教育事實は、世の親達、教師達に無限の示唆と暗示とを與へる多くのものを含んで居ると確信する。

由來教育書には斯うすればよいあゝすればよいと記したものは數限りなくある。然し私は斯うした、そして斯の樣な結果を得た、と大膽に正直に記述した書物は殆んどない。此の意味に於て、著者二十年の體驗を語るこの告白的文獻を、日本の教育者及び一般父兄に送り得た事は大きな喜びでなければならない。

◆四六判・三六〇・紙裝
◆定價各一圓三十錢
◆送料十四錢

■エー・エス・ニイル著■■■■■

霜田靜志譯■■■■■

問題の子供

問題の親

「問題の子供」とは何か。それは困つた子供といふ程の意味である。あの子は亂暴で困る、あの子供は泣虫で困るといふのから、謂はゆる不良兒と稱せらるゝ者迄悉くがそれである。著者は斯かる子供等は徹底的な自由を與へ、彼等を解放することによつて彼等を教化し、驚くべき效果を擧げて居る。本書は卽ち其の實績の報告書であつて、本書自身が既に問題の書であると言つてよからう。

ニイルは前著「問題の子供」の校正を讀みながら、「これはいけない、問題の子供を書くのではなかつた、問題の親をこそ書くべきであつた。」と叫んだ。蓋し問題の子供を生ぜしむるものは問題の親である。それ故に問題の親を解決せざれば、問題の子供も解決する事が出來ない。本書は此の立場から、子供の取り扱ひを如何にすべきかを述べたる名著である。

四六判・三百數十頁
定價各一圓三十錢
送料十四錢

尾高豐作編

子供の取扱讀本

あなたはお子さんを仕合せに育てゝゐますか？

子供は取扱ひひとつでどうにでもなる。それだけに子供の取扱は兩親にとつても先生にとつても眞劍に考へねばならない重要な課題である。子供をどうすれば正しく取扱ふことが出來るか――子供の正しい取扱は、子供の全生活に對する科學的な認識に俟たなければならぬ。

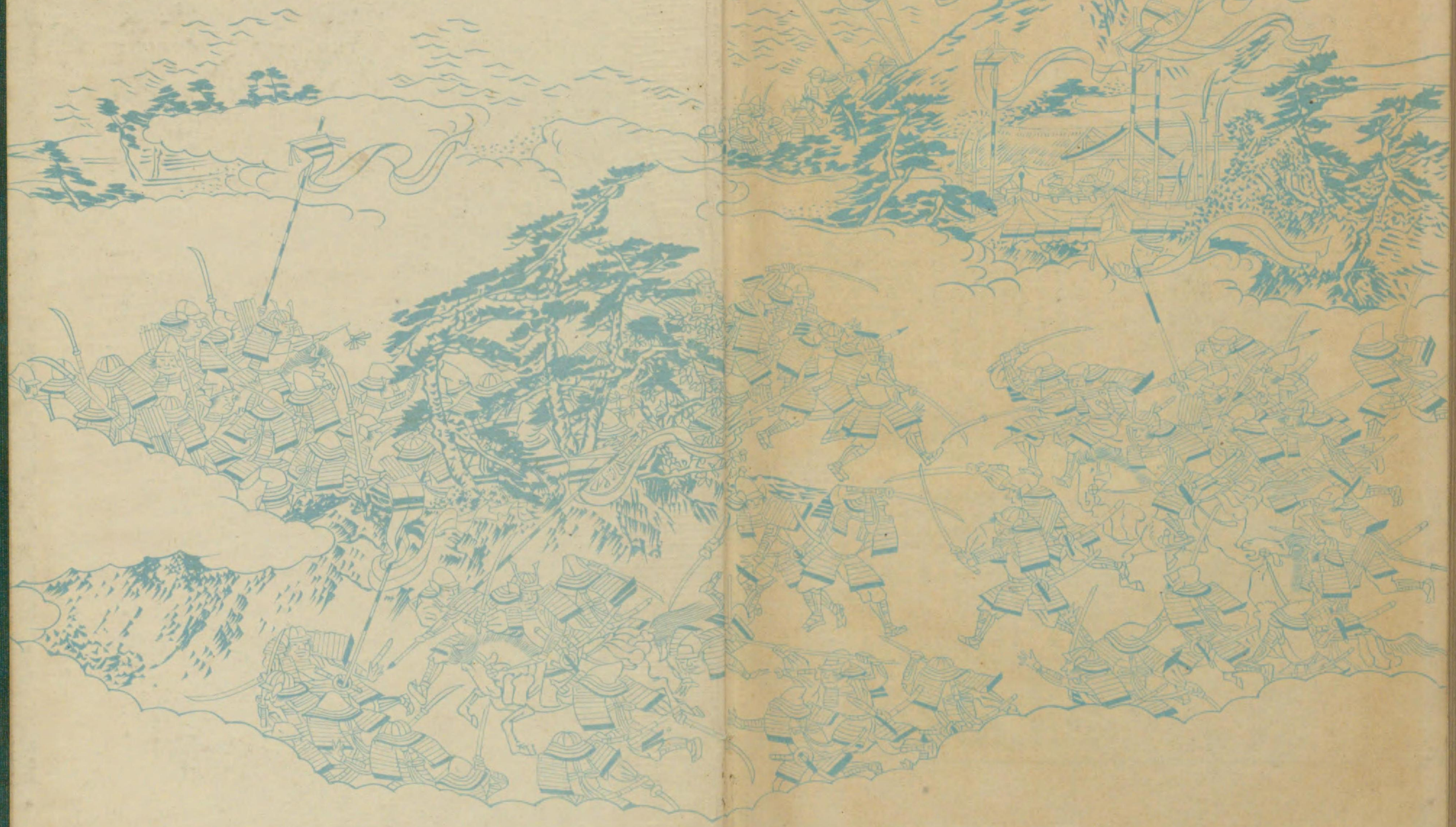
子供の生活に對する深い科學的認識の用意の下に、一課毎に具體的な例話と問題を點綴し而かも最も平易簡潔な文章を以て、子供取扱の眞髓を說いたもの、すなはち本書である。子供はどんな時に叱つたらいゝか、どんな場合に賞めたらよいか――これ一冊あつたら誰でも子供の日常生活の取扱について迷ふことはないだらう。全國の若き兩親、兩親たらんとする人、師範の皆樣教育者諸君！　本書によつて子供の本當の生活統制法を學んで下さい。

第一課　いい習慣をあなたの子供につけるには？　**第二課**　食べ物についてよい習慣をつけるには？　**第三課**　あなたの子供はあなたの氣を引きたがりませんか　**第四課**　子供があなたのいふことを何時でもよくきくようにするには？　**第五課**　兩親が子供を腕白ならしめるには？　**第六課**　子供を罰するには？　**第七課**　子供を暗示にかけるには？　**第八課**　嫉妬深くて臆病で、嘘つきな子供をどうしませう？　**第九課**　あなたの子供は何か身體上の惡い習慣を持つてゐませんか？　**第十課**　あなたはあなたの子供の成長に助力してゐますか？　**第十一課**　あなたの子供に正しい玩具を與へるには？　**第十二課**　親であるといふ仕事？

定價六十錢
送料十錢

609
431

楠足利湊川血戰



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black